序

そのかみ貞享元禄のころ芭蕉翁
七編をあつめて蕉門七部の集と
いひもてはやしたるの比のこと
なりけるやうにてこゝろ
くばりなりしもとい既世の人
論はさらなり論はず是非論
ずとかや

めらはせ所の老くのあらはれ
蕉翁一世の変化のはらはら流れ
の先達を志しむとするあまたは
俳諧の一つの道に入て握翫し
て懸命せんハをうさぶりのし
変る事蝶 其名をのあらはして追
其角ら編集をえらひ分てあらそ
ヒ沈の俳事を捧りて世に

序ノ一

弘めむるを欲ることあきらかの
商賈に移神を凝して業を
切なるあるべしさるを又
俳諧門に入て其たをまねんと
おもふものもこのなりの意に
倣ひつゝえてこれらの法集まる
こゝにはしる新古の云の雅俗の境
をも明らめ蘊奥に

[illegible]
[illegible]所の七部の集をみるに栗乃
[illegible]誰この家[illegible]
續みるに栗[illegible]正[illegible]
骨髓[illegible]なつみの考く
[illegible]花實座[illegible]晋
一家の[illegible]流を盡せ[illegible]
抵元實のあ[illegible]後一變[illegible]の体

序ノ二

[illegible]に載さるるを[illegible]
書を[illegible]取捨の大[illegible]
[illegible]僕
[illegible]晋の流を[illegible]
かの風骨を探るとい[illegible]
[illegible]理を[illegible]
[illegible]一流の口質[illegible]
[illegible]雀躍[illegible]

[illegible]

平安夜半亭九董書

天明七丁未冬

其角七部集序

[illegible]

不肖收羅狂歌之雅戯而藝之所下
識淺深極之文字他如何俳諧之一體
而其流派浩瀚雖然業不能新撰書林主
人常請專為狂人謂新集但集句所
象之如蓄梅閒之中之一世其中之集適
讀讀之在風体去後梅原且我見者の
莫愛者如是如其一也者本
即知之流之發動懼無號焉者見而為一種之
果之淺深流也海新江都書肆而

鄙生之書七録年来不清集一言之補諸余素
受不受書之為人懶之氣量録之蓋遊於筆
生く不乗而発没不能以擬紙云

天明七年未十一月

浪花□主人

嘯古人貧交行之詩吐而

戲序

翻手作雲覆手雨紛々

俳句何須數世不見宗

鑑貧時交此道今人棄

如土

風を世を拾ふ枝の栗

晉其角撰

ヤブハ藪之濕り

虚栗集

改正

礼者敲門ちぐさ花咲ける也　幻叶

賤ゝ春餅よ萬ゝ宿ちん　三峯

初元はゝかゝりの床やしゝ烏　玉尺

先伸よ太山おろゝや門の松　殘詞

春柴賀葩太祢さ宿を山路光　翠紅

俳ヲ焼て富を知日丸猪士ふ　麋塘

句ひゝり今年廿五ノ翁　文排

嵯峨るやと蘚かさ次藪柳子　杉風

いそや吾地なゝ小神のくいとりもる　信德

月い文科しあれ我蓬莱の朝日守　友静
釈迦逝く弥勒進ま次国ぬ玄　春澄
山杉やうゝぬ敷ちりゝ名の春　千之
六尺袴光ゝ磨く人海し玄の つ　千春
春ゝに松い食ゝめて年ふるや　卜尺
ちらるゝ人ゝちりぬ男ゝ　楊水
春ヲ何と風のこ南め時ゐの海老　嵐蘭
餅の室根深を蘭乃薫り哉　嵐竹
海老卧乾餅をうゝつゐ玉あゝん　北魚
屠蘇ゝゝで傘すてん海ゐ時ゐ　楓興
紀伊のちゝの国や竈守　李下

餅の角こ南先の白蛇眠りけり　洗口
初礼や冨士をかさゝて扇指　枳風
代ヲ様ス退世ま鴻乃髯純し　仙化
民の戸や松ま餅さく百代　柳興
初たゝさや出ゝけの鴻乃空セ椎　嗒山
花ヤセ吉野こ味線国ー栖ー鼓　才丸
烟の中ま通れ民昏ゝるを
花むゝん火く出見の世乃紀浦　似春
天和三年試筆
霧さもあま顔洲崎千ゝ代客　其角
力乃正月ヲ屈原ゲ醉　嵐雪

むつき秋きさしいよ男ふて　藤句

其二

浦畠をあやゆるや世乃ふる戎　同

塩鯛い死ヲりつて祝い主　其角

芹炊く盍ハ妻乃うついもれ　嵐雪

其三

しゝ乃春の奥孫もあり　樽ヲ富　同

杖ゝ乃ゆもる　梅のつけし　藤句

三線乃及第　蝶の冠しゝ　其角

とゝかゝまぶい声ふるしかつゝ　嵐雪

芋室乃雪百や百ゝ下乃菜言籬

ゑうとゝれうゝ首の早苗ゑ孫　杉風

情うるや都い雪乃ゝゝ乃菜　勝延

何故溪邊双白鷺

死憂頭上亦乗糸

髮あゝ物憂芹ゝ沢道北　其角

小神着せゝ俳句へ梅ゞつ戸　同

追鳥や梅枝ゑ息をゝすけゝ　千春

うゝひすれよゝゝあゝの蘚賣　翠紅

鵠ハ日ニ不ル浴セ白

烏ハ日ニ不ル黔黒

川鳥白くを浴やせして白し　楓夜
澂澂くきらぬひの影奥白し　全琴
浪ヲ焼くと白魚星乃遠津海　藁塚
雪を深て白くを流せ冬菜川　嵐朝
白魚を賜ふく海せを晴ル簡哉　翠紅
きらく魚の昔汀乃澄の清くを　心棘
鯨打く釘乃角くむ芦へ水　黄吻
芦のあやしく蝸牛ぬ角のかくれ水　志水

在原寺小くを　鼓角
美男村乃柳いむくを泣せうり　芭蕉
うくひすを潔よ祝むるう嬬柳

俤よ凡女襦かさくう乃柳　杉風
昭君乃柳をさん屋塘う乃　才丸
柳くかくあくも猫ヲ訪夜式　木因
むくけくあ柳よおつる樺う那　四友
川凡ヲ夕日やすくこつるめ網　友白
柳よいかぞ柳のもあくしの夕燕　嵐雪
傘ヲ祈くかくやぬを鶯　其角
被つを先舞くかく蓮乃小蟲　曉雲
声小ヲ松もはけのくう白鷺　羊角
行雁や凡のくを麦の玄盛　在意
友鄰の約丸蛍やきくん雪雀笛　野笛

如かりて　　嵐雪

ちゝ亦玄猫ゝ似て焼てうるはしの才丸

愛あ侍る猫い傾婦の媚ヲ仮　東頭

意ちや猫うさ〳〵とは翁根山

不生不滅乃心城

滝棠乃鼾ヲ悟き　孫さん　像　其角

蓋立ヲ折てさ〳〵るに早し温槃粥　言水

寒食

木食を香炉の烟なる日かり　鼓角

寒食の日旅人ゑ〳〵に飯つゝん　菊白

寒食や竈下る猫乃目を怪しむ　キ角

俤ゝ貴妃のおもかゝめる鏡ノ月　四友

春雨偶興

春乃餅りひて遥城の秋と誰　其流

烏賊の目り反て鳴る乃後ろ　工迪

三陽

酸子　桃裏の詩人　白

蒙ヲ白ゝ　山吹乃粥　其角

榮泉の蛙小判ゝ身をよせて　李下

真二　　柳奥

けゝ〳〵背子土圭ゝ花ゝ〳〵　同

さ〳〵波ゝ〳〵蝶乃釣竿　其角

風心扇 つきぬやゝ南かゝん　李下

其三

僧乃謂シうとは庐山乃桃の時　同

巖ゝ毫を握ルつまゝ　柳奥

ゝ面式之とを敲ゝ囚れゝ　其角

雛ヲ抱てゝゝゝ桃ゝ咲りけり　其流

雪月乃夜れかゝゝや夜遊雛　苡白

桃園乃猫ゝひさゝゝひか車　彦豪

ひかゝゝ意て胡蔥のゝゝ丸し　松濤

雛ゝゝ桃壺の脇ゝやどりてゝ　拳白

龍田姫ゝめけん雛乃かゝゝ綿　子堂

雛九ゝま婦や桃の家不老園　羊角

汝千浮御蔡の咲る尺てゝん　卜尺

汝千ゝゝゝ嘲ゝ裾引かゝゝ哉　嵐雪

濃支出ゝゝこゝ月ひゝゝ汝千ゝ　立志

夕ゝゝや金をゝけゝ蜆蜜　以負

憂方知酒聖

貧始覺錢神

花ゝゝゝ世我酒白く食黒　芭蕉

眠ヲ尽ス陽炎乃瘦　一晶

霞幕て青淦る夏を嫌ゝん　嵐雪

詩

童子磯を枕れる唐梅　其角
月ヲ濁す汀乃蓼ヲ芦刈て　嵐蘭
浪のさゞ波よるこの紙衣　芋
琵琶洲の雨よりの船の問ふ　一晶
朝よりを月をみるの紙衣　芭蕉
浪人の点をを講おもめす　嵐雪
やぶ乃一およ入りひそかさ　嵐蒙
散さくら同宗旨ヲ誓ひる　其角
藤ハ退之肝魂ヲ奪　一晶
雷鳥のなつよひ嘴ヲ鳴ちん　芭蕉
汐てる海ヲ鰹乃る　嵐雪

傾城乃続を拾ふ神代より
羽をうよ角ヲうす風流姫　一晶
化しけ指ヲ出る草の月　其角
破蕉誤ッテ詩の上ヲ次ク　嵐蘭
勢鮮ヨ西瓜ヲ贈る遥ナリ　嵐雪
はるゝ志めぬひの松浦片撥　芭蕉
めづらしるあけやゝ乃萱庇　一晶
蚤ハ私乃蓋を乃世　嵐雪
掬入レぬ新ハ六十乃荊ふく　嵐蘭
市所ヨ妙庵ゝ世ヲ東　其角
人の怪異穂長の霄ヒ襲ヲ黒ッ　芭蕉
一日朗

松田くびすの雪乃曙　嵐雪

ふる郷や陣中よ似セ鮒（イビキ）うく　其角

山野ニ飢ル餅を貪（ムサボ）ル　嵐蘭

盗井乃月よ伯夷ガ足あゝ数　芭蕉

ちくさい武士の憤草（イキドホリ）　其角

凡々記艶書をやゝ捲　嵐蘭

笑ひさんやよ帰ル冬（ナツ）鬼　一晶

暁乃病言を母ちさ面さしれて　嵐雪

つねよ麦くん有まこしり　芭蕉

花よ栖庵山の列をたゝん　其角

柳よまゝて瀑布（タキ）ヲ酒呑　嵐蘭

詠懐

花ニ今頼政ガ弄を知ル牙哉　露沾

永杖よ猶ふべし麦乃山　幻吁

冴い里よ麦彷乃日数ゝ那　似春

雨乃ヲ咲て扶壺（キツ）の怒ル心あり　麋塒

仰ぎ猶し浴（ヨク）堂乃麦よ千鬘（カモン）　素豪

麦酔る故山よ孫ゝ忘けり　云笑

にくしとて琴（ヲシ）を代（ヨガ）乃峯の麦　四友

余ハよ男舊暮よ花をみる男　杉風

あゝ笠カうゝ世つゝふゝ花見猿　嵐蘭

狂とゝへ花人ゝ合羽日照傘　千春

吉野義経堂に
斤足いまの塵いとひぬひらう　千之

雨

庐山の夜上壁いと花丸畫かん　楊水
山いろむ上壁東の美人かん　才九
落花雨美人の化粧流しく　一束
もいい楚地雨のもろうや腐足帷　洗口

七賢の自畫よ
花と世を弁よろばこう翁う邪　樵花
躯不花死も不休兵
於屍もと流るかぎひう　嵐蘭

蓑着こる樵りろ川の花の虹　彦有
惜花不拂地
我僕為もよ氣寂ゆるう　其角
代樵
彫笛縫蓑花よ晴やんうに世哉　其角
小町乃像讃
おことこそ風犯孔乃姥さん　宗因
美をふくむんろさんろ流式　丈排
鉢中如よ氣ろのう沢ちろ　友句
いろろ云へく同人よ沢テの搖賤　家豪
白のんんろ去人山さん　桃風

殿へ招ワ蕎餅うる揚茶屋　嵐雪
昼乃君うけしと咲り受　揚　杉風
燈のとき来にけるや山さくら　利久
遊人去て昼乃さくら戎畑　子堂

目黒杉蘇堂にて

うゑ世毛をかりに咲ぬ山桜　其角
梨花ちらに拂のこゝ小蝶すぐらん　嵐蘭
海棠やうき世義人の市移ひり　樵花
ちんろうを口杉はむ乃紅物や　九十
ゆんぼや春とらぬ家毛忘草菊　山店
さん屋吟行

詩を加賀ゝ千ゝ　蛙うれ　枫奥
角田川長い田ゝつ世ゝ　氏　文排
麦食ゆ咲る菴ゝ田ゝ　猪　千鯨
田ゝゆ新生懸や屋ゆ多　拾蛍

清房の高奥

下仕ゝ新成ゆ豆腐召ス　雪叢
さゝかうきみゝやゝ夕月夜　四友
菜毛毛の盛や水司ゝ枕のかゝ花　柳奥
蝶ちゝ菜の花や入あひの鐘　翠紅
小雨ちゝ蕨を志ゝのゝれ傘　家壽
あさつきを懐ゝ妹ゝ里　小寺　紫苟

仙家ふいろさびぬ　捨てんそて川原　鳳尾

山吹や无言禅師乃すて衣　藤白子
腰に成薪乃飢若早蕨　其角
子路ら廟夕へや秋とかすむん　同
其きちゝ成れ十六日乃文　白子
古鮎の鱠のさかりを惜む戎　同
搭伐ありとひくく　杜川　角
金城さて弥世の分ちうれてや　同
福袍さむく伯母妻よこゝ　白子
ものうるさい言ひかけとなりしかの代参　同

心ふ鼠ハ昼乃灯をのむ　角
あさ南ゝさ文字賊衣魯家　同
小神成ちゝ涼店の風　白子
夕鄙ゝ宮女のお撲めの　同
大盞七ツ星をちらひし　角
日分月分西風よ剣ヲ曲ケル　同
弓張瓜豆殺ま半ヲ射ル　白子
里かゝれおれ紙子のかしこて　同
おゝゝは鄙ゝ者の吉原　角
米の礼芳稽ゑよいとせけり　同
初木かゝ成餅ル志ぶ寺　白子

曉乃明仏の弟水地ゆ　同
嶽も餅へかひしりの春　角
猟師をいさむ女あとかく　同
あらぐさやぐ首ぬの池　句子
めつまと具足芦刈ゆつよ剥きりん　同
婆鞠よりわらく島おろし丹　角
鳥葬よりのあるの月そうさ　同
寂さめ俤をさく波上鶺　句子
残る月ゆさぬくの奇ヲ夢　同
蕪の粉掃ひ髪ゆめてやる　角
幽乃虚勞さくしくちりよげる　同

雨母親乃面ゑ伏厨む　句子
烟くせくく男の立て茶水くさし　同
入あひてを借ス度ゑ女　角
蝶居士ゑ花の念ゑ夢ちりく　同
佛よけぐる菫立乃家　句子

改復

かくさまで正身い抽の玉嘶り　芭蕉

待年しく古今夏くれみる秋弐　四友

山嶺と啼々る紙受ヲ切ル斧　素山堂

おくと詩寺春拍の奈ゑ隠しや　嵐蘭

思ひ音や連歌ぬす人ゑ紙　翠紅

ほくさまで表庭や淀乃賓亦　千之

半日乃下ア周春ゑくさまゑ紙　仁春

錦帳の絲世浅草ゑ戸や郭公　嵐雪

誰ゑ謂し南天の玉ゑ附郭公　信徳

拘把遊歳日干らん　布くさ沢　菊白

ゑい徒月ほくさまで志ヒ竿　杉風

ゑ紙芋まぐ韜ゑ月夜ゑ郭　李下

郭公ゑるゑ蜀ゑ新茶哉　才丸

錦ゑ北涙ゑ洗ゑ風郭公　才滴

かくさまで乱くゑぬ里ゑ引ゑん　一蜂

あゑゑ北鶴瓶やすめくかくさま　濁子

冥途年い秋や待ゑんほくさま沢　中村如菴

蛍桃や伏ゑくさけいかくさま　東頂

かくさまで羅紗乃毛衣くゑん　松緑

雨ヲ少夜月化ゑくんかくさま　勝延

花めくくゑ柳いらし初くさ沢　四友

ゐ紙おりくれなりぬうどの杜　調艶
皐毛刈人よきけとやゐ紙　其流
清く少ン耳ゑ香焼く郭公　芭蕉
鶯滴ヲ吹み奇く　其角
我ヲ人きゝす我ヲ啼ゐ紙　同
姿旦夕て卯花ゑ文ヲ　言水
昼ゑ卯花ゑ白ぬゑ　才九
蟾ヲふんで夜の卯の花ヲ憎ゑ　其角

四月十八日即興

偽レル卯ゑ桜ゑ咲けり　千之
鰹をのゑむ樓北上乃月　其角

古の法の裸ゑ秋乃風　同
さゝ立波ゑ康梁ゑ　之
藏庇菊ゑ南ゑ乃ゝ晴　同
京越いゐぬ蘇鉄一カ　角
俺ゝて公ゑみ詩を着る移時　之
呉乃旅衣酒をかゝく　角
ゑ糒西施ゑ影をこぼゑん　之
蘭ゑゐ紫乃汗　角
簾内の小杉音形く雪ゑく　之
さゝ入ゑ庭ゑ蛙這ゑる　角
俺ゝ人ゑ志頃乃古城ゑしし　之

石山の秋月と井の晩鐘　角之

尺八の梓さぞ家の乃九末の

遊ぶおとりの國ヲ尋スル　角之

花日〻に老い娘乃あを引き　角之

松ある隣り羽ゝしよ彩　角之

百千多繰ゞ仕名セ待　同之

面おかゝらて薦ヲ仮ル　同之

年世〻今宵庶山の松ゆ彩　角之

毛吹崑山よ名を晒スラン　角之

木かしよ浪士乃市ぬ行　角之

田火消乃素さやく松　角之

經ゝる佛魂屋乃こゝりゝす　角之

夕へハ秋の怪る羽さゝ乃　角之

拒の袖ゝ涙誠あるる庚衣　角之

ゝゝゝ鳥乃霧よ迷ゝ月　角之

盗人誠ゝゝる鎗の音ゝけく　角之

胴乃宵寒ゝ波出衣嵐　同之

年と日ゝ賊のつゝ薪ゝみ尽ス　同之

ゝゝ紀を荷ふ越の山業　角之

剣術誠虚谷ゝ手ゝ時ゝ　同之

有朋自遠方来ル　角

むよ粮空嚢よ銭をゝゝん　角

蛤殿〳〵やまもの焼ヲ　同

麥刈始よりはらひ

若麥やむら〳〵もめるこゑ　自悅

高〳〵れよ麥の穂風の初うたう　卜尺

青さ〳〵や草餅の穂ゑ出たるん　芭蕉

麥莚ちいさていりう賤の戸　蔵句

ゆのくけて青麥白し氷雨祭　光朝

麥よかち〳〵薄よ月ヲ乃んまその秋　其角

贈ル一鉄ニ

亦や鰹令あるべ　勢　素堂

消〳〵雷丸河鮫を吊ひ鰹　雷虫

こゆるくや蓼をむらく乃塩鰹　光竹

妻鰹乃卵の中ゑめぢう哉　其角

ゆゆ乃驚よくまのくまの池

菖ナル尤我ゑの去ゑれ鰹やん　一晶

魚ヲ折ル乃ゑ光ゑ拝ゑあや光　峯白

誰世よう冶郎ゑ投〳〵かくゑ　秀治

重伍　廿五句

菖把よ競曲中伐菜ゑん　峯白

粽ヲ去ぐる鬼乃戸　其角

龍ヲよが白面ゑの治荒ゑく　松濤

御歩(アユミ)ミかねる雪の山橋　白

錦干ス木の間の月も冑(ヨロヒ)すて　角

蔦乃茵(シトネ)ニ猿疵ヲ吸(スフ)　濤

家をへて鶚(ミサゴ)旧都ニ歎きけり　白

漁笛ハあれと瑟きこへぬ蜑(アマ)　角

志ま松嫁ようつき云出なり　濤

馴ぬふくさ代抜て旅寝し　白

情(ココロ)ある不破の関屋乃小竒り形　角

むかしは江戸よかへす道心　濤

荻柄乃乳(ニュウ)木(モク)をとても重うぬ　白

破蕉老ニ家化さめく寺　角

蝌ひとり月代窓(マド)の沸しる夕　濤

詩人の餌乃鱸魚(ロギョ)ヲ憎(ニク)シト　白

花ヲ啼美女盃を江ニ投て　角

わひくの音(イロ)ヵ柳きどかし　濤

若き蝶と道心わしひ定める　白

鴈(カリ)鴨(ダ)ヲ飛ゐ川天ノ流しつ　角

三線ヲ十市比里ニ学ぶ(ヌス)夜や　濤

あらし　か裂(サキ)ヲ走(ソ)ろ女笠　白

祖母ハせく湛(キワリ)ハ流石家まあり　角

悋利ヲ殺ス荒雪の砦　濤

春を盗ム梅ハ破戒の其一ツ　圖丙

鈴虫をの風りよ付て寝あ夜哉　蘇白

首川鶴乃うう[illegible]き巣や坐雨　樵花

ぶぐふく鶏乃庶子鑑[illegible]　云笑

ちちゝ雲ゝ富士の浜ゝう江戸幟　長吁

ちりめんを義乃けしきゝ菖蒲　才紫

世乃あやめ乃まや菰　雪鬣　嵐雪

粽りゝん驛ゝとめゝ[illegible]の風を　其角

行田乃うゝ乃[illegible]

川崎乃臼の匂ひるとゝて

うゝ桶や行くゝて波乃晒白　自悅

時鳥の二声之声

抑ゝとゝけれて

五月雨乃端居古紀平家ゝ匂ゝ　嵐雪

五月雨ゝ乃小田ゝ鯉ゝ童　蘇白

瀟湘乃夜や鯉ゝ　柳奥

履盃ゝ乃ゝ田奇の乃ゝゝ義　春豪

いらゝ乃ゝ猫ゝ川ゝ乃ゝ訓　言月

七夕を琴乃ゝ[illegible]

左月書ゝ我義虫や毎ゝひゝ　嵐雪

蚤道書乃ゝの里ふゝ[illegible]　春章

蚊の帳をちゝ泊乃ゝ四ゝ哉　洗口

蚊のこゑ赤校のつゆ霜の七　子堂
蚊すだく蚊の園亦れうし　翠紅
昏やみまどろむ草葉社舎り蚊生る　蔵白
蚊を焚くや麝姫が閨乃私祝　甚角
蚊のなるきいてゞ小雨の夕へ　丈若
夏は夜いとりあさ秋乃旅枕　杉風
暮ゝ〳〵不破の関の北弧枕　鼓角

和スニ古詩ヲ

琵琶ヲ焼くあ井戸を煮る夜酒淋し　喜角
谷水の鬼ちかくれうこゑ笛　同
うゐこゑみよ軒やらいすやもし山　房定

こゑ人き蛍火しゞやし云れうし　春泥
草の戸ゝ我い夢ゝあるゝ　其角
うすもゝく羽織網うゝ　嘸雲
岩巻栢を宿あり顔の蛍ゝ那　言籬
あさちゝ地蔕の閑居冬　鼓角
女恥しう蛍ゆる毛ゆ　蔵白
青瓜火や蛍ゝ　李下
ゝの苦し夕蝙蝠ゝ涼ゝ風　子英
うゝゝ北涼ゝや髪千女枝ゝ　才丸

酔登二階ニ

酒の瀑布冷麥の九天ヨリ落ルナリ　其角

雪乃甕　尤勝　水巻月乃雛　芭蕉

冨の内嶽乃あうつきをさめく

禅定や珠数ヲ薪の雲庵　文排

山菜黄乃かゝしや重さふ乃風　嵐雪

田家納涼

茸の餐ゝ金城包むしゝあう邪　其角

塩うゝ乃ゝをゝ濁すしゝあうゝ竹　长吁

蛛の巣ゝうゝ世濁ゝゝ山しゝあ　才丸

柳ゝゝや風ゝぐらゝゝ月しゝあ　家豪

むゝゝ面の木陰なうせいゝゝろてん　拾蛍

懶や花影ゝ蝶の世ゝゝ酒　芭蕉

なゝゝゝゝ蝶乃娘ゝ抱ゝ　一晶

弁帰いなゝ風ゝ人や移さん

汗ゝ行ゝ風ゝぐゝ竹襦半　嵐雪

夕風ゝむすめゝゝん添寐籠　杉風

東籠や足踏ゝ夕立の面　松濤

水桔ゝ蟬を不断の瀧乃声　幻吁

木さゝゝや蝶共あけの舊衣　残詞

夜乃蝶蕉共さく日向の影　鯨足

一晶乃宿坊ゝ

日蓮ゝ桔ゝ蟬の鳴時ゝ　其角

我が

乞食の形天地を着る夏衣　同

扇にて賤の姿や蚊を追　友礎

唐扇にすがりつく和扇の艶と渋園　羽白

扇固つるまじ法師　俗の風　鼓魚

破屋あれども傘を用ひず　嵐鈴

夕立の雨あらさじと荒屋の軒　東頌

花立てゝ夕白ハ世ゆあるれりり　一晶

夕白にすゝけぬ富士乃枝形氏　放白

優婆塞が不動白しやゝ白の毛　長吁

荷興十唱

深草巻葉此蓮風情色さくん

香うるがゝ風蓮葉を磔りり

そのかゝさ蓮羽よ魚乃見躍

荷ゝ小ゝ毋ゝ鴨の枕敷屋

青蜻蛉のゝちすゝ枕蝶り形

お乃ま浮ゝ巳ゝ畫ゝ

玄美蓉美女湯あるゝて立りけり

荷ヨうつて散らるゝ雨ゝ村雨

蓮世界翠は不二を沉むりく

或ハ唐茶二醉坐ゝ蓮乃掘

素堂

一もゝ落まれ人をまちい家
武さゝ形成秋夏之けわ涼ミ笛　翠紅
切麦さゝ沈さゝ　水　里　才丸
草鞋（サウアイ）ヨ草鞋（ワラヂ）ヲいゝ　徑（ミチ）アリて　一晶
はゝめ成いつゝむ雨の汚（ヨゴ）レ子　其角
月出ゝ日北牛遠ゝ夕歩ミ　図両
元日を待る市所ゝの松　紅
鏡刻附乃斧元　けゝる　丸
八十万箕の霊（タマ）とあゝる　晶
上姜葉成かゝよさゝる市女笠　角
関寺深ス三五夜乃曲　丸

雁の来ルいて揚弓を競（キソ）ふん　紅
冶郎ゝゝ　盞乃論　図両
金谷ノ泪ヲかゝゝゝゝゝく　晶
荒ゝゝや姑蘇（クソ）の風呂（ダイ）臺ヨ入　角
亂往（ソカ）昔古首つるべゝゝゝゝる　丸
主人の瑞を告ゝ初鶏　和
花の比数へ連歌賞ヲやる　角
楊まぐゝゝ女洛東にゝゝ　晶
地女の扶ゝぐゝ深雪帯　和
小云ヨ彩る郎（ロウ）ゝゝ　丸
はゝ洗や西国撫子生れぬ世　晶

無樹渡江ヲ松九本あり　角

蕭焦て雷ヨ霹靂らん　丸

もるよ書ヲ鬱　囲窓の夜　図両

犬ヲ引て加るい酔の翁ヨて　角

婚姻ヲ耶ヲ　恥ヲ名ヲ成ス　和

早稲い実ヲ入晩稲ハ躰稲ついり　晶

神ヲ祭ヲ　スバル　満ン時　丸

多飲ヨ起ヲ竈下に身ヲ成ス　和

少ヲ声の踊ヲ　晶

五桶のりヨ高ヲ　ヲ先ず　角

新米をてうけ米れいり　和

花ヲ世ヨ伊達ヲ風山の淺美法　丸

心ヲ　すこの　剣おき　庵　角

灯前乃夜線　雨を　奴ニス　晶

あ〳〵に　ゆる　四乃図　両

年の輪比半ヲ　ゆる名越ヲ和　翠和

改秋

初秋の風かくれい白し　靜西風　東須

初風よ風吉ろ菴もあきぬるり　濁子

梶乃葉ヤ　夜ヨリ　原　天川　嵐雪

我や来ぬひとり夜ヨリ原　天川　嵐雪

月ヒカリの衣乃おもて月を菖　其角

新吉ヶ敷契い草ハ志のみまて　同

治郎ヶ　うさかける　夕　雪

蟬身よたゞつる乃遠恨ミ　同

河ヶ　消　捨　木つむ　角

森を獨りを含うさ巣　雪

把を　乃　捨草　角

人待や人うれしるや赤椿　雪

蝶女うれしる地月さ　角

ヶ　国　啄　雪

敵よ　て　義　角

ぬ　思ふ　濃乃怒　雪

色こは　京　初萩の奏　角

聖　彩　乃文くゞり　雪

家ヶの月　あ　琴借　角

新ヶ　花よ　る小神武者　雪

美山ヶの笑ひ茶旗の風流　角

鸚鵡能　同
叫いつを辺る清水　雪
山城の吉野もすびは松もこゝ　角
菱川ゝ乃吾妻　雪
狂哥堂古紀拔をれ乃数　角
ちぐへい酒ゝ凋む仙　雪
簑を焼ゝみゝれくむ君義　角
ゑゝ孤舟女房さめ数　雪
萱金かゝしゝうん籐　角
松虫まゝぐ住あれの宮　雪
雪ハ裡衣桁ゑ蔦乃かゝる　角

墓姫月ゝなんとゝん　雪
若流ゝ私あの北おゝ　同
ゝゝ明ゝ拔蚊屋越ヲ切ル　角
ゑの脚布撰ゝ　雪
五十乃内佐　恥ゝ数ゝ　同
花ゝ宴ゝ佛容ゝ乃ゝ　角
やふ入ル　同
数白氏之隣ノ女題
二星私憾ゝ形ゝ乃姫年十五　其角
ゝ長ゝ移ゝけん糸ゝ竹ゝ諸調　嵐朝
寄ぐる星ゝ鈴森や角豆ゑ　拔句

隠家恥汝嫁星は霧衣かくん多　皷角

世〳〵は阿房こうひの空や汚し川　楊水

妹寐こいも窓文〳〵根漢白し　松濤

夕かも星あひそめぬ色帝妻　雨精

誰多向〳〵晴やる形捨つるへ　拾蛍

蘭尾艸や稲妻法やく世の手向　茂白

たくわ火や定家の烟十文字　其角

玉祭る里や掻刈男香炉〳〵女　松濤

貧せこう初寒〳〵舊羽織　春夜

臨素豊秋池

風秋の荷葉二扇をくるえ　真角

和角蓼蛍句

あさくさは多ち食らふたくさ哉　芭蕉

あさくさは北斗を巡る刈　茂句

夕月乃暁も犬の声朧し　蕉花

あさくさは金于て〳〵そ　暁雲

蕭然ちけうん友ともつるぬ　黄吻

萩の音い憂化此しのうくくく　暮角

夕かわ久〳〵とゆる

御祈を感して

ほのさくさ市仙洞様を命り郎　真角

破芽

風妖ゝ蕎麦の面すゝ　李下

猫捨やうゝみをくゝす芋葉原　東洋

芭蕉の女神ゝゝゝゝゝゝゝゝ訂歩　小山玄甫

家荒れ雨戸よ立る稚美人　其流

蕭条刈り西瓜に枕うす男　其角

方を庭前の秋此あるうて

渠何代人見て うゝみ朴て　嵐蘭

三夕

西行

秋来ぬ此法師すゝの夕哉　宗因

定家

舟出るとゐ屋乃秋暮夕哉　嵐雪

寂蓮

和歌の胷ゝ山の夕哉　其角

さゝゝは秋向ゝゝ東ル秋姿　自悦

人ゝ寝て心ゝ夜ルを秋の昏　麋塒

田婦子を駆て釜ゝゝゝゝ心ゝ　卜尺

我立り蚕花雪ゝ犬ゝゝ秋　杉風

いかゝとゝゝいつ神の時雨ゝん　子英

猫よくゝ蚕を養の書いすゝゝん　其角

三ケ月や弥良のタへつかむらん　芭蕉

謫居

象潟の月や流人のすけ舟　琢菴

月よ飢て旅人古江乃ヲ賜　皺角

月ゑ〻ら家婦ゑ情のちろ式　杉風

昼のゑめゑゑ鶯三輪の森　東煩

月と酒越後の小若木ゑ下女　其角

ゑゑひを日比の月北窓哀れ　四友

牛吼く山路ゑ新ゑゑ　柳臭

月ヲ敷征人首を洒銭ゑん　山店

弓カラ西ヱよゑゑゑ秋の月　明治

何配所ゑゑ国の月　蒙玄奔

冥士の月戎ゑゑ人を目読　疎言

故寺月影狼客我抑ゑゑ　北鯤

月よ親く天帝の墻よゑゑ　才九

舟中吟

ゑ人舟や木ゑゑ掉ぬん　杉風

芋くゑ屋よゑゑ雪れ　三峯

ちゑゑの月ハ四角なゑけゑ　友吉

芋ゑゑ裏鞭月ゑゑ　云笑

や紀茅舎白ゑク里乃桂ゑ那　翠石

四ゑゑ永ゑゑ賞ゑん月人川　友白

芋ゝ試抱て洒よ為ちろんけゝの閑　桐橋
誰カ家の思姻ぞ月ゝ讽ゝ杉ゝハ　雪叢

土船ニ讽掉ヲ月ハすめ為ハ濁レとも　楓興
浮生ハゝもゼを　放す　盞　其角
興ゝもげて西風ゝ着スル烏角巾　柳奥
萩すり閑風みゝゝゝ蒹　長吁
蓬生のうちゝゝい蚊屋の中ゝ明　角
蹠乃ゝゝく門かゝめゝり　楓
ぬす人を矢ゝ狙風窓を射る　吁
下ゝ女ゝ読ゝ　ゝゝゝぬ　俤　柳

洞ゝも直衣乃法ゝまを　切ル裰　楓
むゝゝ西夜の文抗ゝゝく　角
月ゝ試ゝゝ縁ゝ髪長ゝク　柳
うゝ紀を盛乃　酒中花の肘　吁
爰ゝ影ル　樹ゝ枝を痛ゝ人　角
かゝゝ凡震ゝ　蒲ゝ　楓
笠軒ゝ鞠ゝ　月ゝ　吁
冥ゝゝ所　伝渡ゝ　中山　柳
柴荷ゝ妙の僕ゝ　ゝゝ　楓
老母試ゝ　ゝゝ　吟　角
う紀雨北奪試ゝ　同風　柳

乞食の鉢をつたる蜜蜂　吟
多くの傾り置い垣の蔦　角
こゝ迄を仏ぞ降ぬ雪の中　枫
ちまくの蛍は髪もぐらん　吟
羇行のちかつて下官哥よむ　松
仏ゐ杜み美湯治山中一夜雨　枫
看おき炉を三線ヲ煮ル　角
打坊よ化地ぐりゆかりの　松
まをゐめす　獨り寝れ月　吟
稿をめく業平うゝ薄うげ　角
夕へを契る蜻蛉の木偶　枫

進めすゝ錦木供糧立ちかゝ　吟
三七日ハ地蔵よ粉ゝ　松
食腥く乱懐の相を啼鳥　角
奮悪の数ハ花は色若し　枫
毛虫い幣の孫ゝ争ふ　松
稱磨歌妹乎雞時乃羽　吟
多多幾晨奴良乎加毛　秋風
松風乃里ゝ叡する式　嵐雪
芭蕉庵ノ夜

墨陳を拓鼓よ陣る花の邦　其角
亦此里賊ら夜寒に火井う紅　其流
物数寄に世捨さぬさや薄菴　黄吻
石菖をつゆの落てうせ給　永原愚心
うつゝかんて艸刈鎌を近く久　梅白
鄰化てそゝろ花ヲ略の夕へに　翠落
傳よ曰稲負鳥い〻べなり　四友
養うら色くますちに於芋刈男　子堂
於芋干而ら夕新の夕へさんあれ　嵐蘭
はらはら山賊さらに　案山子　紅　子英

重陽三句句菊

風菊盞筵冠　止
有蘭徘徊　止
徘門　有芳菊　止

朝　芭蕉　嵐雪

賀茂つゝに去やしらん　小菊系　拳白
雜木の硯菊をあるや芳き　翠紅
菊ハ山路うかんの寂契りうん　暮角
似蘭に対り移中一床の菊　秋風

千家の騒人百菊の余情

菊うゝや菊よ詩人の質茂賣ル　其角
松乃色ハ去とふゝさゝゝ葬　円

産婆吉 松茸尺々伸て秋の

小上戸熟柿の林かくれさや　信徳

うや汐木淺う柚味噌の夕烟　一蜂

落椎ゝ雨ゝやうら咎ゝを木葉菴　拾蛍

栗拾ハ麿毒戎 秋乃ゝ来ゝ乳　蒼席

焼栗や 聚蘂ヲ 身乃面　仙風

指出れ才を栗ゝ啼こゝろ　幻吁

栗のかゝ藻の市ハゼかゝ[illegible]べ　其角

ゝぜつゝやゝの和山新 酒旗 凡　卜尺

傘合羽ゝぜつゝ時面影ゝるや　嵐雪

汐人帰るあゝしゝぜの命哉　皷角

[illegible]　[illegible]

ゝぜ此地戎いゝ[illegible]杉ゝ人佛の日　[illegible]

こがゝしゝや澪木の枝折ゝゝ小舟　蒼席

ゝゝ新やつゝを栄乃蓼の毛 長柄　寛満

表[illegible] 市ゝり新[illegible]茅のゝゝび　杉風

カゞ力此夕へ愁人の[illegible]の[illegible]を[illegible]　其角

遊心寺ノ高雄カ廟

表ゝる茅ゝ乃ゝ粉ゝ茅ゝ乃視　才丸

板ゝゝ茅ゝを鱗乃龍 紅井　羊角

雉のゝゝん綻白ゝ瀑布のゝ　四友

憶老杜ヲ

髭風ヲ吹て暮秋歎スルハ誰ガ子ゾ　芭蕉

九月盡

秋の夜杉風が秋城師を共　其角

上冬

僧うかまてけり松に雪時雨　杉風

ちらちら雪は笠をうつて

世をふるも苦しき宗祇のやどり哉　芭蕉

ちらちれさるりけ茅城軒の伽藍哉　友白

爰ちりちりとて芝居村時雨　其角

君火燵うち身時雨小神の郷　枳風

紫乃暮山よ紅のしぐれ哉　子堂

葉柏や風ちらし数寄やと　素堂

赴泊船堂塗中感

波道黙々夕日や埋むる小糸　揚水

夕かすかん虹の倚稽山　同

端山木の風かんかへり茸　其流

冬蕨乃を刈ちらす素足猶　素堂

冬籠の道ちるへや牛乃屎　卜尺

十月蟋

きりぎす蔓花巣にて鳴ぬる　嵐雪

冬蚕枯て寒径素伝いぶくるな　子堂

冰ちん日法の故懐日ちる魚　友白

落葉乃多ら踏せ寒る翠　拳白

落葉ばかりや納豆切ッ寒夜　才丸
雪白し枯野ばかりの月夜　翠和
号を吹く肝煙む夜の木枯哉　烏巾
枯板扣のう寒ふかしすゝ瓜　青扇
茶ゆ去や上戸の才　梅乃兄　筱白
無窓の文り短冬の下ゆ釜鳴ル　杉風
貧山の釜寒ゆ帝声寒し　芭蕉
松風や炉ゆ冨士代やく西屋敷　其角
玄岸刻火着ゆ芋の幽う之　同
犬引てゆうゆ指ゆう里夜奥　同
宗干冨ゆ野ん山里ゆさび刻て　柳奥

世ゆ千ゆう沙人ゆう搗ゆ　秀露
谷村ゆ七世ゆ搗ゆ遠ゆけゆ　家豊
老尼ゆ歳の備やすし夜ルの搗　家宿

雪夜

佛ゆ抜いさゆあんゆ湯哉　幻吁
夜着い重し号天ゆ雪ゆあん　芭蕉
南ゆ心地狸ゆ酔る雪ゆ　麋塘
僕ゆ雪夜犬を枕のゆ葉ゆ　杉風
ちんかゆ寄ゆ狂句ゆ法師ゆ児　李下
雪を吐ゆ蒲投ゆ　化粧姫　皷角

富峰

弱つゝ山の桑の雪
不二の目鼻混沌の王死こゝろ　千之
大圓り磯石おのゝめんゝ雪　敲角
富士うゐ寸麦田い雪ゝ早苗うな　空鬼
ゝゝ富士木綿ゝ原のけゝさ哉　其角
世ゝさうゝ香薬雪ゝゝく明わ　鳳尾
菰ゝゝ雪ゝ麻ゝ雪ゝ　九十
幽ゝ推て雪と毛壇の艶うな　拳白
蒲おゝゝ雪ゝ女の角にせ　言色
ゝゝ雪ゝ丸住鶯ゝ雪ゝ　紅友
ゝけゝ雪霜ゝ雪の下女　蘭山
雪を織てびうゝど白ゝ大ゝ山根　利久
皂莢の宮い雪ゝゝ雪ゝ窓　峡水
雪ゝ奥岩肩うゝがすゝうゝ　家看
舎者定雛笹ゝ雪あゝゝゝ　才濤
旅行　ゆき
城ゝゝゝ合羽い雪ゝ昏　信徒
松原い花脚ちゝゝ雪の昏　一晶
雪の薪牛追ゝ雪ゝ舞　文排
雪ゝ犬筆ゝおゝゝや　四友
憶李白
月ヲ見て東坡い雪ゝ岁投ゝん　才丸

河艇よ貴妃の仏を意　子堂
遊の代乃小哥を琴ゑ図思君て　其角
早苗車を喜雨蟄手引　丸
カルのゑ感あり持の花盛　堂
鰯すくひが濁す日の後　角
秋風式名殺が待乳山すみ　丸
購人出家ヲ　夕へく　堂
稲妻けめき及ゑ弓の才をやとす　角
鏡の月を覗くして　丸
山寺と碁をうつ風の古寺ゑ　堂
茶僧の首鳥豆ヲ啼　角

顔洗ふ麦食愛のひとつまて　社
蓼を蓼ふ家の子　旋　堂
住めべすむ祇工ぎうはあの　角
吉原升秋ようりう乃里　丸
花千深ム恵磨賢いたつとと　堂
菫をさ〳〵和哥の擂鉢　角
彩さ日も狭布の上下胸あいす　丸
ちゑ見ゑよ埋む儒乃門　堂
今哉角天地を揺るのみ破る　角
鼾よ琴て睡洞ち入　丸
業風や孤雛レて笑ふける　堂

名城松よ荒を彩す　月角
金堂むかしは夕へさやうにも　九
伶ぬすびれく玉虫を舞　堂
くさ刈ちり平山よかれけらん　角
文幣うけけを穂屋の老垣　九
絶ひくて隠の肩ぬく白雨　堂
さつ男の奴みをや弱荒　角
誠ちり時ぬもちくおぶんぬきそ　九
吹雪代人する岩屋でる　堂
花さうぐ告よ尾上ぬを松ぬ　角
やすくひ鮫信の業さらく　九

まつ潜む邪すびしめり気遠ゥ　堂
俳諧童　友ちるみ　里
魃是破戒教生　角
飲酒ちもちうれる
妄語
魃を煮てびる賣世彩さ式　一晶
倫盗
賊心や河魃よ迷ひの代ちも　李下
邪淫
妻ちくぬみびな憎ちそ小秋衣　其角
びて干や杉ちん蔥乃うみ白　子英

腸ぬけや三とせあわぬ恋の魚　壁笛
捨られてくみぐを湯婆の涙哉　全琴
人何ヲカ土肉の臭るナル狼　揚水
鄙ぶり粟よろこぶ人へ送る　拳白
炙て淡漬氷る丸屋うれ　雷虫

夜學感

警氷ル夜や蛭蛾灯盞ヨ相を閉ル　其角
雨氷ル寒菊ら少我　一命　樵花

茅舎賞水ヲ

氷苦く偃鼠が咽をうるほす　芭蕉
蘇よあわしまるほど水の柱哉　虎吟

閑ニ春ヲぬす人ちとせ雪ル梅　其流
軒の柊梅を撫るに如ぬ一つ　嵐雪
る屋ヨリ水仙の香ハ已独うれ　友白
雪よ和くあ仙ル勇敢ル　四友

師走の月を

あるるる白髪遊女乃閨の月　嵐雪
寒苦ら孤婦ら祇園と哭ら哉　李下
寐ざるも夜ヲ哭島ル寒苦僧　才丸
貪苦ら哭日鰹つくるを俤ケル　其角
入れ丸ぬ月ぬ刈る命ラル　執筆
癈ル夜ル俄ル響や里乃森　云笑

神乗舟澪の灯乃巳白くなけ　嵐雪
りまや火燈す鮫の白きとやく　抑奥
三十日　川芋恨なるもの雪乃朔　角止

一年三百六十日
開口笑無三日

飽やとしとなりて紅乃轟と　李下
世さ白波千大根こぐあ　其角
月雪ハ芋のあ〻戸や枯つん　同
か〻ろきい書ヨりみはゝ声　下
百ヨみる狐し秋をちくさめし　円
頃婦を蘭乃鞦よりる　角

敵ある間ハ色ハ　草
色ハ天下一番の臭　下
文盲ハ金拾ハ金を以テ喰ル　角
ほとゝぎす豚ハ寿ム　下
真池ハ思ひよりつりを麦　角
士峯の雪ハ加賀反　下
枯めて国ハ千曳ハ徒刻　角
多〻川ハ黒木串材　下
蠶あ〻の面みる男内ゆし　角
春雪ハ〻ちあひのち気　下
月ハ鳴く蛙ハ上戸や　下

薄も白くなびく川の縁　角
新しい苔寺の孫成うへうん　同
院の庭のあるうれき宿　下
故郷をうるおす小野を引出る　角
住居をかくす八重のとぐち　下
墨深き女房をうつを形じ式　角
新しきれうき地ちゑ多　下
節よう新鶯何をうの情　角
三線人の思ひ泣むし　同
月い袖かくらう瞰る瞰のうへよ　同
時の恋しぐる夜ふかう　蕉

聊ちゝぬ僧を多ふの茅舎
しるし山僧傘を舞　角
垂竹のどうぐ式霞よ深ふ　蕉
打場乃重ち米飯を高　角
一乃姫里の庄家ち養いま　蕉
鼾ちゝ式ちゝ云髭を責ち　角
ちゝきす怨の霊と啼つう　蕉
う紀世よ沉む寒食の痩　角
皆い老貪重し笠ハさん俵　蕉
芭蕉あるし丸蝶丁ん　角
腐しる俳諧犬もうハちや　蕉

鰰（ホテ）くさて寝ぬ夜秋ぬ月　角
奪入の近づくまで　初　祇　同
たくひつんを菖うみ　蕉
朝りそ黄金ハ鑄ル　小紫　角
風そそ夕へ切篭灯の記　下
酔そ物冷（サメ）茶ハ秋のむ　角
こぬ夜の格子暗を憐む　下
名月ハ前ハ洞よ　角
金橙徑よ粉うみを思ふ　下
葉生姜を世捨ぬ　同
榴花ぬ川よこ　角
茶碗の　角

寸ン法師切レの衣乃みかさ　芭蕉
昔をカム　卒塔婆大小　下
行乃名門を乃ンを花の雪　角
凡夫三百人のまる風　同

酒債尋常往（ゆく）處（ニ）有
人生七十古来稀
詩あそんで年を貪ル酒債哉　其角
冬湖日暮て駕（かご）レ馬ニ鯉　芭蕉
于（ヲニ）鈍さ夷よ関ばゆるすん　同
黒鯛くゆ女ゲ乳　同

枯藻髪栄螺の角を巻かん　角
魔神を使ふ荒海の磯　蕉
鐵の弓取猛さ世々出る　角
虎懐く雄たるあつかさ　蕉
山寒く四睡の床ぞ吹あつし　角
うつゝ火消て指の灯　蕉
下司后釣舟移る月を牙　角
西瓜を綾る包ムあやうく　同
哀いたに高嶽吹凋るん　蕉
みちちくの夷しらぬ石臼　角
武士は禮の丸窠おくる歌　蕉

八声乃釣の雲ゆ岩ゆく　角
詩あるんど花ゆ貪ル酒債哉　同
春湖日暮く駕ゝ興ニ吟　蕉

栗ちらの一書甚味四のり李杜の
の酒に賞て寒山の法躰を咲る
うれすに倦て其句みえ聞ふ面
白き
俗と風雅のうれ是よあるの面白の
山部に成て人の拾ひ遺鉢栗や
無乃情つるわれ昔を面白の
ふり神社(カンヤシロ)黄金鑄ぶ鑑上陽人
乃宮の中ひろ衣物よ萬化かるとこ

下の品ゐい胃こまり祝ふひの浪
聚始(ジュウシ)の面けを河ふをあり
かるの寺の咒郭舞の面白情を
拾ひ面氏う鈍を俗乃手四川
初心に成ふるうれ人ふ沢
其話震動虚實をわうる寺寒北
鼎手句に煉ふ龍の影よ文字
を治ふの是必仙の書かにあるす
めの寒ふ高ふ拾内盗人を待

天和三癸亥年仲夏日

芭蕉洞桃青鼓舞書

新山家

去年病て去し木賀山の温泉に念工想凡
もとより我か身の志をなくさまむれのまさらきれ
さ月たちある五日かの野を出る事春よりも
わかれほとの我くあそれぬる曝なかにすくなきか
老奴乃十八九わかれるをつまつけなきを風で
のゝしれにしきまかよるに事わほとりかくてはなすへ
湯の事を毎いたす文鱗の旅亭に来人ひまなかり
くきくしきやまきてのまなりぬ一たひ温泉
にはすゝりて此山の閑景をとへは
翁さらは覆盆子とる山路かな　文鱗

雪かとよ麦は穂に出でぬ　紙幟　同

うれしの匂に失せもせぬ世波高きうり

岩根こす鞦の鱗あり走鮎　其角

いちこ殺をはく水のむ猫よ　鮎　枳風

傳て燕師堂あり朝々暮々に此傳伝訪て

庵山聊か　ぬ笑をむ　大原の十如院の

て雪かさなる三日月つめたしとよ　古人乃

香の匂に祇長基佐の俳を物るうれしさ　世よ大原三吟と云

我名三人かあるを偏最なるもてはやさまれ

其一

ちくさや早苗うゑる寺の門　其角

しのぶあるうの鳥尾の下蕨　文鱗

宗長乃名を社常に月晴て　枳風

其二

涼しき麻を本に引る星光り　枳風

水札の孤舟伏ぬる山ふ　其角

柴人よ　如宗　祇何やらん　文鱗

其三

菅蒲あり　よ　弱若蛍　文鱗

驛の蚊遣　枝葉　夢ル　枳風

桜井の枕を　張寝して　其角

身白意の三業法報應乃三如来まします[illegible]
[illegible]と醫王堂前に奉掛 干時貞享二年丑月日

五月雨を法の雲間の月数[illegible]　文鱗

さみだれや湯の樋[illegible]山に炊けり　其角

此山につくさぬ野あり[illegible]やさみだれ

なつかしく[illegible]いかるが[illegible]

[illegible]

[illegible]の花乃曙秋[illegible]帝[illegible]

の島すべてありれ杉[illegible]　奇石怪松[illegible]

[illegible]冊あり

奥や滝雨を流[illegible]谷乃[illegible]

宗祇なつかしき[illegible]我が芭蕉翁の

山路来て何やゆかしすみれ草　芭蕉

千載集　山里は冬こそさびしけれ人目も草も枯るるなり

とてこそ[illegible]

菴三ツ蚊遣を[illegible]山乃[illegible]　文鱗

蛇住ンで斧に[illegible]樗なし　枳風

いつくふる[illegible]世をうぐひすの奥

[illegible]ちる山中平客あり[illegible]

もてなす

多賀い海を[illegible]乃[illegible]　其角

照射みな念仏の上を誘けり　枳風

月清集　秋の[illegible]

為い情をくとも鎌倉岩陽士未孫山の東
て方まうけるよう式あるべきもとり
作るに哀ありて其句ぞろいんといの年
ちさ短冊をはさせり
太宰入湯の時ある人のもとより九献
おんをまをけるをまてあるひ商
ひろう木者うようけきを酒樽岩
唐ちゝめ中てなりにける式
浴日をつんてなう明を宿ちとく鶴舎
にいろく松風い松日数なりとく芦の陽年
ありこを波濤ろくあり大江の海年

清作る所思

墨染浦の鰐岩響惜まん　文鱗
黴雨の嵐尘頭一曲ゆえ絶へ　其角

行潮暁越を通り作るとく曲士よかえりく
深すぐ風呂を通り作るとく曲士よかえりく
新長谷寺に詣ゝ　其角

志帆所帆　寺
漁家やすゝひ酒なとゝかさゝ岩磐　文鱗
にまゝちさちし寺る式みるにも旅のあはれい
まうはさはけるむ鳴の長明はのをこやと
いよ所ふくなにゝ人るあちれす波あうと

よう矣し我人のかゝりけきは
ものゝ知る芦北まゐする蔡夢弓　文鱗
蠅なくい一を形れん夏乃菓　其角
露の器我稱し五山のすゝを忘く
先達長寺にいゝゝ或曰無詩俗ゝ人と
愛に話なし我よ俗形し友木立　其角
名を始め名北涼ゝを孔く　文鱗
園覚寺入開山佛光禪師をおもるに所
かゝ常おゝす蓋都うゝハゝく生る人平
むゝのゝもし野島肩よ則し白竜袈裟よ現
すと侍へしの生世のありさまうゝ倚ま

ま向さ鵜二のゝもり架ゆ白龍をさゝゝうへ
ゝ谷屋ゝ山ゝ人無心に
ゝ物ゝく我すと澤庵和尚若相山順孔よかく
せゝゝひける弟勝よ杉ゆ
法乃色空ゝ蟲乃巖の那　其角
常盤木の落葉みよゝや藤の根　文鱗
かゝゝに梵千大巓和尚の号牌をく礼し
香一燈ゝゝまよ銭を包けり　其角
彼和尚のいゝゝかゝる世我ゝ宇山ゝゝ
百六十ゝ世ゝゝゝ十二ゝゝく業徳の名あ名
ゝ下に擅よ一箇無尽若ゝ晩よ遊ゝく詩を盛晩

の英風錬磨し且ツ俳諧に自悦の妙を傳えたり
かれを委く載られ舞しめんたちよりかゝる筆
世にのこし俳事を耳に妙を傳る貧者原子也
東病枕ふにひとしきとし貞享二乙丑正月七日
いくつちとせふして栄屋の雲の中に消かくれ
おもかげ清名世に勝世おもかげを葬送しせるすや
跡に写りありとも生影一盃の蕃麦湯にを
きりし追悼集みかし案に幻呼とかえんゝ言
流句をもよくん涙いとうきくるや

三日月に若命あやなし雲の梅　其角

花落に濱川自悦とのみあり東山の比彼和尚
にまみえくかゝるめんどうり清岩寺しかるを淨
書か年書院京にありて父母に寒山が笑試
とげぬ和尚の遷化を告られけるに折くるしひ
ものへとぞ杖のむかし此清句をとりかへしく

浅花になに黄泉の緑なうしん　自悦

草枕月をうさ〇て露命慧をぬく今ほと
帰京に報を尾陽熱田に足休る官ある人
家に告る円覚寺大巓和尚ことし清月の初
め自分自のくしにはと梅の手向ひに和して遷
化し其まゝよくし二季の字をも蒔る孫とて世
常ヶハいとうわしきよふかなく新蒼此僻に

[illegible]

[illegible]

四月五日　其角雅生

[illegible]文鱗士又芳白[illegible]道の[illegible]草堂を[illegible]

[illegible]　文鱗

[illegible]

[illegible]

東奥の[illegible]

[illegible]富嶽の奇秀[illegible]

海岸孤絶黄金をつむへく[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]化堂[illegible]

[illegible]や[illegible]　其角

文鱗

狂雷堂　晉其角述

虚無齊　鳥文鱗校

丁変郎　川蚊足筆

附尾

屋敷を駒千代の屋敷をさらし共　李下

なるほどすぐる夏草の湯炎　文鱗

舟待んと野渡の藤袋ぶらん　其角

毎朝の蟬庵雲の岸の藤　数足

月や殿ゐる形見の親よ　鱗

ウ

春の雨揚屋よ志賀る思ひ也　下

なるみとあるさに女の名ちらへ　足

大将を士卒も同一日若命　角

芦の江の埋む船の衝　下

鱗

清水や和泉の雨と淡路しま　角

鶯一清に法矢多稜く　足

京貪き三代の書我の新法師　鱗

日暮小き加茂下若色あり　下

月の出く秋を桂の祝あり　足

嬉しき時多宮司灯を繼　角

あるわ鴉絵の色食とられん　下

方延やつと母の祝ひ手　鱗

二

舞一夜麦刈比若宿りて　角

雨の林乃り枇杷折りゆく　足

引ちやるる高山和高山土車　鱗

世を尺る今の山嶺乃京
鍛冶の槌汀眺めるきに烏帽子きて
下足
来るうりうえよ舎利弗
角
世の末末の浦泉よみるに
下
ちらわぬ撞きひらの形めを
鱗
麻呂言葉乃の酒屋よ世話
角
三人の僧は勇を作る舟
足
男山表八句をのくしけり
鱗
斷うまて九城よ杖つく
下
くるの後最屋をいひれて
足
涼しあるるやみのまを
角

観音へ寝る来る鶴乃長形り
笠つけ太麻の世まれ書なる
キヨヒヨニ
しる霊鶏花のうるに分をうけて
宗祇 宗長 押さ〳〵年
下
鱗
角
足

西行の家

彼鹿を追て靈山の會下弓箭投捨て入給
ふ津々浦々千佛の一數と詠ん人誰の家とも
馬蹄を駿る雲鞭新たにして走るまゝ
卯人呂頻あゝのゝ

才一

馬蹄々秋我誘て岩根の家　舉白
佛乃瞻ゆく見て　稲　才磨
見月城聖北水木も偽とわて　嵐雪
杖手ゆ行　雄乃　麓　其角
ゆゝ小雪舟さゝ　丸

弁乃烟の已う彩里村　白
麥ヨ賓ヲ看き何ウ彩もよし　角
山岩被しき小柴投やる　雪
榛名なる大夫の声師ヨ彩ゆく　白
あんどんとあく雨しぐる宵　丸
毛を被る已う友とや狐　雪
僧手嗅す家茄子てんかく　角
此かけしひわすゆもの艸　丸
紙をくろ先と深るまの風　白
ゆき恋勝ヨあく渋乃　角
負物あ〳〵て〳〵ん遊者　雪

酒乃鬼記とゆ名乗出　白
〳〵陸ゆる浅〳〵川雪の秋　丸
富士見すへふ紅月先よあらん　雪
彩る　建〳〵麻ゆ〳〵ん　角
種ヲ物上ゆ手作る武北年　九
五貨七道乃ゆ共行ひ　白
出系ある空蟬ヨ方をなて　角
代のゆるゆ手ゆ訪へ　雪
護あへど幸サい同ゆ海乃沙　白
鯨　かゆ先岩雪とあひき　丸
石焼乃鄭ヨ飽する山のく

木葺乃殿舎みな佛達
うゝ金堂高くそびえ所狭
角
月夜町屋家々の窓書
丸
米籠の人見る家乃聊やちゝ
白
打ちゝ古ハ筆摺り曲ケし墨
九
あゝ始まゝ力城付る州抜
雪
凡る物ゝ絵ゝ青池の底
白
鉄炮の玉城ゝ外衣木立
九
甲冑ハ根方の雪の窓米
雪
山里家張樹葉多ませく
角
ゝ乃者秋若彩凡
九
白

ウ

茶屋むすめよ凡せく舞よさん
酒たゝやし賣ハうれもかう
雪
月新ハ満る道ゝ賽うちく
白
尚も閑を陰陽のうへ
九
市祝ゝ撰ゝ古く伊坊の貝
九
鰯のかゝら住よゝ去来
雪
大濱家猟雄う無武ゝ彩ハ
角
うゝの果ゝ去ゝ彩ハ京
九
彩アル松ゝ縄ゝ有ハ
白
言歩ゝうへの小田原の茶
角
夜ハ炎ゝる物ゝ神ゝ去の裏
雪
白

睦月みそかの日忌ヒ　ます屋家　丸
花よりもまさる紅葉の日ぬる　雪
と人もうらめ帯の結ク月　角
行きする祭の申をかくる出　丸
やゝ鶴しくあらぬ　白
和行の雀打とる和やうす　角
雪花布試をたゝやうする　雪
さうよゝさわよ寒ふ尾あぶり　白
ん物ゝ川伏者てし活人　丸
豆ゝ擂よ白酢ゝむわゝ舟　雪
義りみゝゝ石原乃椎　角

門の犬赤ゝ白ゝゆゝうて　丸
吠ゝ魄ル厨ふ書ん古ル君　白
新ゝまつゝ比乃月ゝ影　角
花ゝ数あ神と荒神の御造　雪
十人の塩ゝ又ゝ州　白
菖乃ゝ猟の麻賞　丸
流ゝ酒田の柄杓名ゝ　雪
赤沢ゝ亀少十時　角
執筆ゝる売乃ゝ花散花　丸
天狗ゝく物かゝん　白
尤迄の盆ハ産婆ゝ人ゝ歩ゝ　角

[illegible]虎手縄[illegible]城とる　雪
下関よごゑ川あり　白
日[illegible]　丸
月入て自我唱ふむ声　雪
小田の秋しも色合こぼす人　角
蝶花よあり[illegible]も四乃恩　白
九十九[illegible]久しの春　丸
小山伏彩山卧雲かすみ　角
[illegible]失かなそれ　雪
[illegible]餌乞の[illegible]　[illegible]
[illegible]

名

蛙鳴の[illegible]田よ[illegible]郭山
素波手出て[illegible]る月　雪
[illegible]　白
向ひ川縁[illegible]　丸
郷中の嬶[illegible]　名
[illegible]　雪
[illegible]　角
[illegible]遠椎の木[illegible]　丸
[illegible]　白
寂寞の[illegible]作よ宿かり　角
[illegible]の[illegible]　雪
脇指[illegible]小盞　白

つゝと来まひきのとそ　丸雪
ちゝはなも乳探すすき岡乃婆　角雪
寂かに成ぬ川〻妖まの新　丸角
降まさる星霜雪瓦　白丸
はの外をつゝみあめのかゝ　角白
花ヲ得テ山く石ヲ得テ流也
はゝの漿まゝ吸へく　雪角

才二

世乃業を遊ひありけと霧の玉　嵐雪
人を定まるわ者者夜半　拳白
色〻〻戸渡る雁より雁立く　其角
玄阿ゆさむ詩乃り列　才麿
尺る出る唐の陽者羽日彩　白
古き代をける塗籠の書　雪
昌明き鏡匠者受領ちく　丸
一乃撰麦の かゝる田樂　角
簡〻く牛の御前の森ゝ中　雪
御〻のめ胡蝶ゝ　白

ゆるす入る拾るうぬ　金雲　搖拉　角
濃茶をのうむ　多乃水上　丸
伊勢使素袍を竹よ　猶　白
昇足用よまいり　あづや　雪
大判の名も　拾ひ　や金衣　丸
花芳　沐生　初　鉄の　吉　角
貫之　公　ら人　きいさ　雪
一ツ　一の時二　川　寺　舟　白
水る　芳　酒の　摂待　寺　角
相撲　中　年　祈る　自　佛　丸
年月や　真田よ　似る　流

城の市門を前渡り来る　雪
俗鶏の　ける　の　多　御　丸
筋　を　胡乃　たり　生　角
手や　や　樹を　放し　る　風の　雪
笑へ　時　雷　の　詩　白
あ　も　給事　夕　昏　角
医者　同　の　腹　拾　丸
我　て　乱の　留　浅　誰　白
堀の家　家　嘉　け　り　雪
多　時　あ　け　よ　散　摘　平　魚　丸
高　い　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　舟　角

朝霧あさりくのけぬまもう
あるべし　藏梅津キを飛ばける　雪
月をせく碁をもる宮せや　白
ちかいとる　毒の　角
見る疫病蚊帳　丸
蚊のまんゆうのうちる　白
蓬生千蔦の釣乃古ル衾　雪
あしかしく除地の盛り物　丸
配當のかかるするとうし　角
満つ夜浪千　櫛ぬく　舟　雪
神樹や白梅の湯桶飛ちりく　白
　　角

千歳下少　棟上乃槌　丸
洛中の人静なる午の時　白
うき世哉とく　酣　雪
夜月夜元のもの　へ　丸
亦こ中男　灯　角
井戸端ふ　衣　雪
せ免く彼岸を立よ死伝　白
早追ふ虫やぬ夢　角
我欲の座浅人千ち　丸
下安う桶行ふ　白
うき木うけた用おろく　雪

散〳〵手名残をしゝ涼袋　蜘　丸
人も住ぬく瓦はくろあ　角
桃梨へ隣のゝ夫乃宝ふゝ　雪
数年も なゝめ八朔の鞠　白
遊廻　四條　名　隣を冷く　角
新諸白九ゝうる　後家の代　丸
晨明や登もゝ　霧　霊　白
一期　ゝ　乃ゝゝれお　雪
ちげの情　白　黒ゝゝぬく　丸
花ゝ戯語ゝ　ゝ　ゝの袖　角
上下ゝ明　ゝ　ゝ　雪

香　ゝ　ゝ　ゝ　白
涼ゝ　白氏文集を讀ゝ　角
年ゝ　ゝ　室　乃小　壺　丸
酢や塩や池の菊菜を取ゝ　白
衆集帰る　宇　名　雪
秋神やゝ　ゝ　ゝの舟休め　丸
光ゝ　ゝ　日　名　陽　炎　菜
のんゝ　ゝ　後河の町　後　雪
花乃前ゝ　糸桜や　白
黒髪へ衣ゝ　ゝ　ゝ　畳　角
ゝ　ゝ　山ゝ　月　丸

妹なる蚊の毋を北ちとゝ
つ移しうゝすい蓑虫を 雜
宮城壁ゑ宮北なる紀ゝそ 畑(はた)あれ
かく捨しゝ武蔵 馳走市無丸
忘まゝゑ取付へ考る弓ゝ形 角
駕輿(カヨ)丁(テウ) 先年 松もすゝ 白
爰淀のゝゝとゝ寺せほゝ寺 雪
一夏試あゝく甚市假ー坊 角
女房ゝ食ゝけゝ八ツ日形 丸
うゝい紛ゝ細工貪ゝ 白
但陸るゝやゝかけ作り 雪
丸

名ゝく都ある子の与四郎 角
ゝゝとみゝもゝなゝ椿餅 雪
ゝゝゝん中男ゑ条のあつゝ 白
ゝゝ痒(カユ)ゝ所へ月の雲 角
宝寐武起すちゝの夜 丸
紙入の多ゝゝゝつゝ 雪
唖かく袁みよや道芝 白
関東乃人のゝ武底清水 角
口ゝりゑ世武つゝ馬賞 丸
ゝゝひくゝ蓑いゝゝ雪北上 白
金ゝのゝゝ武敲くゝどん屋 雪

玄者ガ是當人を産の徳　丸角
名紀契ヲ成せん壽万歳

才三

電の去やまや残る月尾花　李下
風そよ秋の時雨夕ぐれ　其角
ひとりてよりに扱のあるのさふくく　才磨
木綿かすうへ手あらる鶏　汎雪
青苔つく夜よりくく昼寂せん　拳白
薬を篩ふおとゝ淋しさ　湖水
川添の窓い卯角ふ向ひあひ　青井
手あ手さめる浪の泡雪　渭橋
我せらもつちひくん志梶法　普舩
万葉集手　意乃人く　白燕

一ト宮下十二月[illegible]
西城頭下　當浦の　鯨　氷花
雪ふるの小嶽　大嶽訪時く　李下
法水を止ル法乃　鐘引　其角
伶乃ちら　籠　音も妙下　才丸
都ふるもあらで　明る夜　嵐雪
蛛丸下　蛛の伏を書ちし　峯白
聖堂　拘ふむく　世ハ中　澁多
ふく乃　傘ちつ　くうけを取　青井
月を　濁を　邪　四ツ橋の音　渭橋
橋　結ふ　花丸ふ　の　孫生山　普船
白燕

龜眠　春の夕　氷花
蜘蛛　いふむ　李下
蜘蛛　債乃石丸　重さふ　冴ふへ　其角
階ふ　ちの川ふ　園ふ　あやし　才丸
愚ふる　已ふ　猫乃　ふ　縄　嵐雪
波下　流ふ　ふ　墨　削る　釜　峯白
後悪ふ　家ふ　前　鬼ふ　隣ふ　澁多
枝ふ　先　ふ　燃る　松　栢　青井
山井の井筒ふ　切し　玉ふい　渭橋
いばく　宮ふる　遊行上人　普船
雪を　凡ふ　矣ふ　二つふを　白燕
乞　引ふ　ふ　梅

餅〻ほのぐ〻狭さ向の町　氷屯
三日の日にあるる講釈乃家り　李下
加名月長月そもしもあるふ　其角
嫌ふきこもし　菊　綿　才丸
あさちるよ法名はぐ〻ぐ亜扇　嵐雪
ちぐ〻かるちよ船をくいされ　拳白
遅ゝ入しゝるる斤打戸　湖舟
拝こつけこ姥ゝ金舎利　青井
掛硯もれるる沼凡車舟　渭橋
雑煮〻うゝ上ゝ下乃関　普船
腥よ侍達き小ゝ凡はる　白燕

こうゝ窓の柳算乃後不　氷花
個ゝ窓とうゝめるゝ門いあれ　李下
米の白〻芙秋ゆゝうなゝ　其角
半天の二百十日走入あひも　才丸
洋粧の海乃　猩猩の色　嵐雪
心中武ゝゝや胸ゝ花楓　拳白
帝のかゝあふ打ゝし　湖舟
夕灯女孺の哭き音ゝれくて　青井
袖ゝ盗む節分の豆　渭橋
道寸に店屋の魚釣ゝ兎ゝ亜　普船
八乃戸九の戸石乃花摘　白燕

大男涼しれ棒をつひけり　氷花
梵天くめて　澪の走みみ　李下
一さんは驟のり送る波乃岩　キ角
桜の隅をすくめ　蓉　合　才丸
線香の結ひをめくる春の庚　嵐雪
雑炊くて　雄くる　米　孝　拳白
人日の首くるる　孝　俺く　湖水
李くるあれ　有い汚　青井
繋昌　拡　渭橋
茶碗よやうんに住江乃土　普船
此石い亦を月刻　山の雪　白燕

沙脚くるゆくあひの森　氷花
波風を大隅薩广治りける　李下
人質くす　命くかく　其角
沉着那蘇も陸斯もくべ　才丸
歩くるけよ　孤るくる　嵐雪
世なくと殊ユル走乃春　拳白
醤油くる　起　曙　沙弓
帷子高くる　青袷垣　青井
護ナ堂出ぬ匹　如身乃袖　渭橋
うと南　三の病　存命ル　普船
みくと川みく　皆乃評判　白燕

溝つゝ花ゝ月夜の女舟　氷花
其ゝも泪の流ゝかんぢゝう　李下
雨晴るつゞゝ法ぢめ所ほく　キ角
通法繩まゝ早苗あゝ　才丸
昼途飯をゝべゝ人の招らん　嵐雪
衣ゝ包む俗とうすゝや　拳白
うはゝ玉ゝ名残ゝ口を吸ゝり　湖舟
寝ぬを思ひゝ斤あゞる蘇　青井
腰ゝやさのゝハ鳴ゝ川御　渭橋
関ゝ立ゝく穂　普舩
神世の料刈ゝ弟ゝ武ゝく　白燕

負任ゝめゝゝみゝゝまゝゝん　氷花
其分相心ゝへゝと觸流ス　李下
ウラ一切ゝ　なゝる花の時　キ角
月乃宿あゝうゝ　ゝにゝゝ、ゝ　才丸
ゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝんさ乃春　嵐雪
幣ミテグラ　鉈ゝゝ添ゝゝ山ゝゝゝみ　拳白
疫コヤミ　男のゝゝ　ゝ出ゆく　湖舟
釣起ゝ門ゝ涼ゝく掃除ゝ　青井
枇杷揚物乃　驥ゝく　渭橋
伝法ゝを水漬ゝゝゝ通りゝる　普舩
伯父のゝゝゝる刀一本　白燕

雲閑より書院を高く見おろして
昼絹干しむるの曙乃山

氷也
執筆

風月乃眺たえずして其事とすれ詞句にあらはす
事務にいふ風流人て新ひらのへくれ道に入つると
此詞のよりゐてんかむかくしある時人に来りて
今やうの絶句をかきり出しに風雲乃技のかぎり
あるかぎく水月の文字のけをなすにくゝり
ある古上代のよくやすくすれ程なる古あれと
たゞに当しよをのゝいひなしく情なきをや
古人のいへる事あり景の中に情を於くむしかゝる
歟またいひく　穿花蛺蝶深深見點水蜻蜓款款
飛これこそゐとかゝるふれ所をゆるしれと老杜

その他の國にありてやすらぎぬんとやさとの
家毛平に情をふくむまもれやまとうるさかく
うるおつきえきしの中あり結や哥やこころの
給をうりと野渡無人船自横身高かるあらち
の山はとれはたひあくしかんをおくもれいをろ
ふしの地を繕めようしかをこれをうれ稱ようし
て方すをすゝ、すくうくもれ明りあるいかるら
はるき兵めを笑たしめいろなれ花をみるいし
きをれに時の花をつるれ花あり時の為を一
秋毒にはたるのるに同し孫の為い家為乃書
とをなをれ乃ふれ人これ時のをれおいう

はりやすく給のをれいはをさりに為やすし
人乃師ふるもれもを氏人りきまへはるゝ他乃
このむ所に志ふるひく色をうくしをとをを
するれ人なる人のいるを日れも又さる義
を加ふりあるの中あり皆の海巣毛時ふうさ附
に志つを乃改に志れさるうとく内にころ
さくをはりへしとれり余笑ひくこれをうけ
かいひろくれをもをあるれ乃原楚
國をわすれすをやるれいくをころ物を
このくをれはるをわるまあれゆへろ
ろに辨をつるやすを漆園乃書いに

[illegible]
こゝに其角乃俳栗乃徳をえらび
て序あらんことをもとむるもみな
るゝもまいらにひろいのこせる紙や屋
ぬんのこゝろをへなりとやおもふ所
なるはなるもの俳すをいひまこゝろせ
といなひつまをこゝ所乃氏乃ものかく
なるわとおいひやまぶよつく古氏ろ海
ことを序とおもふも何とかりともなく
へしとあらへけまをこゝろ俳さまわぬ

江上隠士素堂

續虚栗集

春之部

改正

新年若市慶とゝ十年ゆわ八十年　任口
淮やゝが形ゝ似ゝりけさ若春　芭蕉
然てなるに嬉ひも翠る雑煮哉　自悦
菜さして栄り（サカ）畑や老乃春　杉風
年の花富士ハつ原名るすかさ乳　麋塒
うゝゝゝゝゝ隣をさうん四方拜　文鱗
元日や家ゝゆつりの太刀帯　去來
志ゝ梅ゝかゝす名乃俳　古男　舉白

先〻の餞うそりの春日うの那　　泊蓬

蓬莱平見這かゝ宮目些さよ　　山店

抱む岡も花を寸きする新日哉　　魚兒

鶯や雑巻ゑ巻る里つゝき　　尚白

松もーろの春ゑかゝ日和哉　　千春

抱ゑ我うれ寸ゑ抱日哉　　観水

日若春をさゝうに鶴の歩哉　　其角

草ゑゝ蓑うつ人時ゝゝん　　山川

松ゝゝ七種ゝやすあし哉　　如泥

總角ゝに手篭や蓑つゝ　　野馬

遊大音寺

梅うゝ寸や之食の恵もゑゝ　　其角

寺の梅松を書ゑす詠うれ　　文鱗

梅の花義経ゝうゝ姿うゝ　　曲水

老慵

蜥ゝうゝ法吾を寸老の貴もせて　　芭蕉

落ゑゝ寸ゝ寸ゝ人の詠かれ　　嵐雪

古草や新仲ゝ土筆　　文鱗

ゝゝみ社ゝ蓑花さく坂ゑ　　芭蕉

春ゑまゝ川過去さゝ根芹哉　　冬市

路くゝ東ゑゝゝ松菜うれ　　泊德

玉ゝゝ乃繻子あゝ松菜哉　　全峯

つゆ〳〵と焼野に立ちやすく蘭うなゆ　由之

春行

昼乃雉第木　きゆる雲うれ　仙化

ちら〳〵と雲ち影ちら　お堀式　治蓬

白波ち越よ雲むし片帆うれ　紋水

村の鶴つくちに足ちるかすき式　巴風

巻付く簟を法ちふうすくうれ　野馬

寒食乃烟ちられぬうすくかな　青丕

同游とかまに詩けち法乃

日の波を離れに武蔵野の月

といつまちうさちよせんとひく

杉陰や鯉乃ちり　不卜

海ちちら俗屋に迫ち秋月式　峡水

浦杉や猪の抱ち暮る春月　扇雪

かちわち矢

巣の角先ち幣へり　村雀

板久の一枝うちちあちち　峡水

滝月ちこち拾ぬ　情ち邪

中山の塔を乃やわく　同

廣さ野乃塔みちちや舞ひち

宿かん高昏を杉乃法ひち　不卜

旅行　うちちき　琴風

のとけや鶴乃巣辺賛かくみ　半残
巣立より毎朝ごとに水ゆむ雀哉　舟竹
すくすくに肌なつかしき娘哉　三園
雀子やあらり障子の穴の数　其角

結廬在人境

夕日影町家に飛こゝろ哉　仝
ちりくゝ麦ばたけの小蝶哉　曽良
世をつくる身の閑なる年
肩絹をやすむる蝶の休み哉　巴風
青柳のいとゝ眠るこゝろ哉　嵐蘭
ゆすりに月をつまれる柳哉　衛門

ゆをあけく見えぬ柳哉　魚兒
曲ものをけく生かるゝ柳哉　其角
柳のハ敷もうゝすゝ歌ゝ哉　同
わかるすつくくに つゝを跳られる猫あり
妻あやと蟹乃ゝ穴に野猫哉　魚兒
哺を分る孤蟹乃ゝ穴　観水

春晴

滝つゝ若虹をけ立る蕨哉　其角

重三

不養女乃雛かつゝ家形
雛ゝてゝ家も女ゝ住れ者哉　嵐雪
孤屋

小式部の局世を雛の小神の名　紋水
所〳〵乃顔こゝかしを桃乃宴　舉白
もとかしや雛を家して小盞　其角
つもるこのもとにく
世をあれて我酒のりん姪の雛　其角

草庵

花乃雪袴を上ぬ浅草哉　芭蕉
鶴の巣もみゆる花の紫式　同
木ぬるより花のもとのいんこ式　風虎
ふるさをたゝかふ中はうゝたむく
獨もゆく姿ゆるり乃花の山　文鱗

うゝ〳〵ゆる花ゆゑ沉む絢の中　舉白
花折と思ふ意あゝいうんせん　仙化
さうさわく碁打ける花乃式　安重
何半に人走陶〳〵花さかり　由之
花うゝ〳〵ゆる庭の渡なをすくき　巴風
朶ふむも花の日影いうゝだゆ　魚兒
宿泊乃花うゝけるゝ
花盛　古ルもうゝを居者り　萩露
詠唯一心　七人
茅よ茅く人のなゝうゝ夕なれ　觀水
妻ゆゝと幾人杖もの花乃式　破笠

赤子乃花ゆいうわぬ小袖うれ　蚊足
むを切て人手懐ゑ産ゑ式　卜千
御靈屋へさう入あひ乃花盛　風笛
あゝおうや飛あうゆ有る花の山　嵐雪
苦ゑあうぬ憂世男乃悔き式　去来妹　千子
花乃ふと母ゑ持ゑう笑ゑう児　其角

日々醉如泥

花持く市乃礫手あうん　同

春興

川辺て鱸流ゑ持ゑう邪　露治
黄精あゑ嶮乃日の影　其角

去年問蠶衣冠を去ゑ乃して　治德
壁外ゑ間角ゑ殘る白雪　嘉荷
月冴て猫乃提のつゑゝや　嵐雪
人ゑ風ひく袖ゑ袖ゑ　麈谷
鶯鳴乃淋ゝかゑる新あうれも　角
初秋半意ゑ忘ぬ月成　治
蕎麦花ゑ小寿あるへうう　荷
樓おうりうぬ曉乃雁　徒
鞦うつ田中の月夜悲ゝくて　谷
俺ゝゑ寄ゑる傍の振袖　雪
思ひゑ揚弓ゑ閨除し　治

三角の浴して夏を忘る　角

我鞍手蟬の声すゝ　徳

砂吹上の埴乃松風　荷

燭ともゝく老すかゝ　雪

小乃浜生の光うゝ　谷

濃墨の蝶もたゝ羽を休め　角

氷を溜る遣水乃窓　治

うゝさゝ乃ゝ乃ゝ紙ゝ　荷

東平の山くゝ　陸

常陸なる板久の奥　陸

矣平　懼て　深む江の鮒　雪

杉苔の石の香乃陰ゝ　治

風夜くゝ寒笛を吹　角

暮ゝけて月の磯屋荒ゝ　徳

御廟の湯ゝ枝ゝ　荷

角切ゝ祓ゝ放ゝ鹿乃影　雪

林ゝ食ゝ　谷

山ゝ鶯乃陰　角

梁平鶯くゝ毒のゝ音　治

答賞ふゝる漆ゝ人ゝて　荷

雪の月を伝ゝ塩焼　徳

萬葉ゝ上ゝ乃ゝ　谷

霞こめ形ら又岩城山　雪

日當午

朝潮襦　蚊足
月片わや　湖風
雨ち秋く　文鱗
一すに芝ふん　由之
歳くもひと　全峯
二歳の山　野水

択風

ちらく酔のさめる夕さく
ゆくわてさく　自悦
銭士乃巻くり　旦藁
禁札の名くり寺乃さく式　嵐水
石竈ゑさく義しく夕ゑ　しゐ
実誠人年ゑ　松江
さく乃人ゆ　孤屋
抱付く指をの　野馬
剃髪　魚兒
ゑり乃形ゑ　荷兮
勢田春望

山さくら咲を注ぐ花拾ふ舟　其角

仁味文

電のゆくゑ知るさくら哉　仝

一田今ゝ[illegible]

誰辛崎の松の花の薄ん　枳風

釣臺

舟奏ん洲濱の岸の夕日哉　泊蓬

山路の鶯鳴く端山の那　冬市

山路をいくゝ[illegible]る蝶花の枝哉　濁子

[illegible]　羽笠

やゝ[illegible]に女松生ゝ[illegible]哉　尚白

あゝ[illegible]を本かゝ[illegible]愛

鶯山を鳴す[illegible]　泊荷

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　宇齊

[illegible]　破笠

[illegible]　文鱗

[illegible]　三國

[illegible]　素堂

春朝

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　嵐雪

[illegible]畫

[illegible]の時おぼつかなや茶摘歌　牧足

春夜

角そうれ乃端を吹しる弐　其角

艸庵を訪ける比　芭蕉

永き日も轉ぶ物つくる雨の雀　同

原中や物ふ丸つくる雨の雀

とゝけうそ　孤屋

啼くも鳴ひ流るゝ　野馬

烏帽子を吉原に揺一むら　其角

山を焼て寒く御蓋巻く　屋

光けうそ　入魚

水鳥や礎の上乃安らゝ　馬

指潮くゝ　松角

禅僧乃赤裸なる涼しく　屋

李白の墓庵蓋乃数　る

俳諧の誠かゝん草庵　角

雪乃力ト行ル音　屋

掘屋や指渡る乃ゆけく　る

男子訳ぬ女乃ゆき　角

子ぬゝを盗入ると立さらふ　屋

ゝ子おかゝる髪　る

血乃涙石の如簑乃朱をはして

奥の枝形成樹桂苗　屋

降くもる和ふあゝ乃の音スゝ　る

名

月夜の雑子乃ひろ〻と角
せ〻らぎ〻鐘金あり〻孫蓋屋
蛍を遠き〻ら〻乃ち孔角
物〻ゝ数薬ゝ物〻ゝ乃ち屋
ゝ智〻ゝ乎り角入てより
親い鬼ゝハ口坤〻ゝ蓑出ゝ角
ゝ乃〻ゝけ〻ゝん月の多月
唐櫃乃ゝ〻ゝ〻ゝ吹ゝ屋
四手漕入ル乃門乃中
〻ら〻殘す彼の宿陽の雷白角
業ゝ〻ゝ乃ゝ成除目孔玄

珠数〻のあ〻り蹴〻く寺乃て角
あゝ〻新物乃〻ゝて所〻る
被麦〻の麦を犬のゝ〻ん屋
〻ゝ乃〻ゝ〻る藪乃切〻ゝ角
五月雨塗ゝ乃蕊〻ゝ答〻ゝ馬
海乃夕〻大陣ゝ〻ゝ屋
思ゝ乃物笑ゝ〻ゝ老の隅角
ゝ〻ゝ摘ゝ〻る麦食乃友

續虚栗

夏之部

夜錦集

伏見西岩ゝ地蔵を詣侍ゝ

本尊ゝ油ゝけさ灯ゝ灯ゝ　意朔

蜀魂墨に背をする鳥根哉　暮角

郭公なくなくゝ花の間いし　芭蕉

清舟や犬もこゝろ淋しき　其角

杜鵑鳴き板を敲やゝん　枳風

書を供ゝく旅ゝらけ人は

るゝ間妹よひとへほゝきす　其角

時雨一夢中しる路乃夢　杉風

侍乳山三句

舟場をゝつゝ来ぬるゝ　如泥

秋ゝゝゝけ鶏多ゝ太鼓ゝ祝　其角

ほゝゝゝ夜麦搗臼中鶏ゝけく　鼓足

蚊足中ゝゝめゝれゝく

郭公変ゝ白ゝゝけて

ゝゝゝゝゝゝ青鷺乃夕　き角

川風や衣干す揮ゝ掛ゝゝん　角

樽ゝゝつゝゝ多皆童ゝゝ　鼓足

初秋乃涼ゝゝて月ゝゝれや　同

扇流日記を捨る関の戸　角

萩のつゆ所乃土産包み折　足
僧と咄しつゝ皆静かなる　角
瓦工おのゝきいとく入相寺　足
神鳴つゝみを詠く　角
折ふしの任意つゝを命式　足
鴨原近き吾草の庵　角
恐嘶きつゝみ鳴くん路きく　足
黒髪惜む月もうひそ　角
江を森る亭の燭燭白く形り　足
るゝ信濃る所田の秋風　角
玄盛梟ゝへ首を尺て　足

勇士の土産味梅を折　角
美女乃酬日長けきとも暮安　同
契めしゝ奥乃繪を書　足
或いゝ任吉次ゝ遣され　角
乞食手馴ゝ安き世を知　足
町ゝゝ二夢うゝ茶筅賣　角
夜ゝ飛田の狐くけり　足
高灯籠枝乃撥あけて　角
晩稲花さく湖乃隈　足
蜻蛉乃一かゝまに流れ形の　角
隣ゝへて撥の糊ひく　足

通り形式冬の驛乃夕あり　角
降うつる雪の玉味噌　足
釜かりよ松の扉城あるうれしく　角
反故ゆる閑お倫ぶ　足
頼あるる都の友れあつうを　同
豆ちゝ数も人よ笑いを　角
世中乃花ゝ駝のうかひて　同
寺ちゝるしあるる春の日　足

妾在閨　十八句

眉帚乃袁うつ曬ふ乃白うれ　巴風

螢消ちゝ帳の裾ちく　仙化
おとのぬ二つ目碁筒よ枕して　キ角
袖口寒く煙ちゝ炭を次　風
旅人の読ちむ春を夕月萩　化
かちうを生ん石榴の多　角
隠家や坂垣ちゝむ秋源し　風
傘持ちゝ君ゝ名を問　化
滝見て乱ちゝ簪のあくやふ　角
山鳥うつすおろ乃　盞　風
花の枝獨ゆ才そいうち妃　化
簪斗月上下ちゝ影しの去　角

雪かゝる門かゝり　風化

ゝよ出口乃せん茶の音

道心みかく志さしゝ　角

泪ぬるゝ小佛乃関　風化

一鞭の数ゝ牛の月　化

薄とり油く遠山の腰　角

胃八日母乃こゝ南りけるに

方ゝとりて衣ゝゝ卯月式　其角

初七ノ歌いゝゝ絲ゝゝに

夢ゝ覚る母をかゝすの郭公　同

五七の日追善會

卯月も母なくして涼しき

香潮のゝゝるみゝゝ夜の夢　芭蕉

ゝゝの雲城乃ゝ月淋く　其角

各悼　嵐雪

卯月ゝ日の腔和ぬ日数ゝ孔　露沾

敝のあとゝゝゝを岸き別式　扶風

有ゝゝく者ゝ向ゝかゝゝ　沾徳

物あまたあの林ゝゝ　舉白

嘶入ゝ音も秋ゝゝ　嵐雪

蛍草に活ゝゝゝ　蚊足

蚊遣ゝいゝて香ゝゝ　去來

生駒や夜業の子よりさ風の音　野馬
坊ごの笠ともにうつむく涙雨　全峰
京とへもの志ほるにやすき被衣　魚兒

岩のうれよりなのたきたる
うくゐのゆえよみてる鯉うな　其角

乃夢子戯ル

下部笠に鯉くらるる日や佛　嵐雪

端午三七日よりあつけれて

京欲うるうるうるむわる魚うる邨　其角
何ごとても菖乃やうりなる　紋水
急き起て菖かうる日向氏　魚兒

鯉や菖さすの日氏風乃音　枳風
儀うぬ妹うり京さ和面うれ　彫棠
るるるる侍清し　花鼓　仙化
白玖子より引もうる陽夕うれ　魚兒
花玖ゐや蘇二京氏垣の中　治蓬

禾村

筍より弁ようる奥ゑ犬あうん　其角
鯉やかり寢の家乃鬱うと　嵐雪

自詠

髮ようる容顔蒼し五月雨　芭蕉
岩ゆくゑ之日月釋む五月氏　去來

さみだれや藻よりあがる水の径　沾徳

ちらちらと雨ふる墨の目隠し　巌翁

蹴滝を閑居の人はかくれけり　巴風

数竿に嫁を乃せる田植うた　吼雲

合羽ぬぎ友とかたるつき田植哉　其角

母乃新物くて田植の女哉　野馬

夕涼や楊ふ着する早苗笠　冬市

雨の日や早苗に休む燈籠　由之

暑さ日やとんぼを乞て

入おほ田守乃ひく墨とうん　観水

まちまちく男も田植哉　不卜

都乃人小桶ふ勅たれうはまく

あをのうす水鶏を老を敲ら　高政

繻松をむすぼれ行格縄哉　濁子

月を入我ぬまを出る格ふ哉　玖也

甲斐山中　風虎

山桜乃枝とがいに閉るむらく哉　芭蕉

古寺や僧なまをうす梭桐の花　三園

むらさみのもとにて

世をとへて安く成る櫻哉　自準

田家

むまくて蕾するさ一度七月　枳風

法ゝ手れゝまゝ放さ侍ほゝる式　魚兒
蚊やり火よ煙けく逐ほる式　溪石
消ゝゆゝゝ芦ゆゝゝる蛍ゝの船　野馬
寒起よ人しつまりて蛍乃人　孤屋
晩乃衣手　弥る板巷式　觀水

末陳へまかりゝく

山里乃蚊寒昏中に啗ひ寒り　去來
かやり焚ゝ西の方ゝの夕ゝ船　黄吻
おちの人滋寐ゝゆのし　枕敧屋千春妻
旅ゆしゝ香わゝ茅舟板巷式　綾戸
初あゝしや吹おゝし行る蚊乃蓼　去來
卜千

啞蟬乃幼ぬ地槽色あい秋也　杉風
渋濯の神手　蟬噪夕日ゝ風　杜國
土さゝさけゝてる日ゝも
蠟追手　妹右れあや爪作り　其角
かゝ成ぬ赤山里乃爪の味　翠紅
爪啗ふ松法せゝ紀日なゝ式　李下
隻北日の入あのつゝゝ雀ゝ風　欺心
ちりの日よ袂ゝつほす　汐揚式　好柳

誦錢神論

一文乃銭いゝゝ寿や友の水　牧足
瀦越えて赤ゝちゝとる清ゝ式　嵐水

合歓木乃瞻りつくぬるさほかぜ　仙化

さゝ花蝸尽くしひのほるゝあぶ　芭蕉

ゝゝ花竹きりにやもやけるま
山林のゆもとあけるゝ　市原ちかく

蟬なけ小野の小町も蟬ぬけ空　千春

虫ゝむと捨木花小町ほろされゝわ　其角

かゝ杉のほゝ赤ゝ附

山鳥も赤ゝと紅葉の木立哉　千春

俳しらに貝ゆく俳をかんこゝる　其角

隣家ゝ樹を切ゝ人ゝ
ゝ花四附先ほを赤
ゝゝ城ゝゝす

何ゝゆゝん六月桐を植る人　同

心法真精口耳粗

蠅を赤ゝゝゝに生死を輕くせん　幻吁

納涼

時ゝいよゝ土用初乃永拉山

ゝゝ者を朝起畫寐夕すゝみ　其角

落得閑

世をゝゝゝゝ辻ゝ法さく涼ゝ哉　文鱗

人のゝ故ほめゝ増俳すゝゝ代　李下

稽ゝゝる樽ゝゝ　冬市

宿二尊院

涼むあや愛宕とも沢史北切系　観水
更るあを漢み数みすみれ　去来
涼しさや雷きき夕間　昏　冬柏
稲電やれのうち鹿乃うち涼む　由之
暮ちかく祭れ留るを涼れ　虚谷
奥刀馬塚みく
はなれ百や思こるもも夕すこ　維舟
源義経平家追討の時
上陸の鐙ふさわけるとく
うの所を枕の石とやや
あすれ百をぬんれ夕すみ　同
逐涼　二句

涼しさや武蔵野原の星　其角
閑乃あやすむ園乃まがり　文鱗
雨後
つまれく水もるのひ蓮れ　野馬
蓮ちく師の剛伽包ム清水式　卜千
尺ちれる麻州公ちちかな　全峰
昼新手ちる蝸乃日傘式　旦只
ひるの花ちるあつき式　破笠
ちるかあや猫乃糸ちなる杉ちひ　其角
山水やれむ胡瓜乃花の寿　濁子
江州ちわて四郷

干瓢を太刀の結ふて放へき　自悅
はるゝや日陰ふまする角豆垣　鉤雪
一花ゝ不ゝ節あるさけ哉　虛谷

卅蕎七夕

夕立ふる蕎畑　きるを食哉　巴風
夕立や祢春しるわ雷　仙化
夕立ふる雷あつく明音　其角
夕立や鍋ふ干ス粽哉　僧宗流
夕立ふる蕎畑乃　主ふ那　治蓬

午瓢

病人を杖もひやるく土用氣　蚊足

鎗ふるゝ乃ふ乃ふ人土用干　去來
うゝねや揚乃ふ以ふ土用干　其角

或人所持の杖ん さ手

何も乃ふ　我ガ頭陀如くろ　友後　澤庵

續虛栗

秋之部

日もすがらあめのあまの扨男七夕　風虎
天川あしもぬ敷屋もゆすぎ帯　自悅
星合や聲女も彩ひの糸とらん　嵐雪
槿を星にわるぬる和らぎ扨うれ　槿花
蚤計や舟引とらん先の川　女綾戸
大内ぬかるもり抱まん星まつり　女千子
星合や打ふまつ、織かるん　壽閑

旅思

七夕まかるぬ藤の孫巷哉　由之

星合や女乃ま手奇い乃ん　其角

贈槿花堂

藤よ曲ル念ひ乃一ツうれ　露治
藤や礫乃日新のうまに　敏足
藤い二人なるあるあ哉　杉風

驚夜雷

ふに時く藤雷手潔し　其角

寄李下

いなつま我手にとる園扨紙燭哉　芭蕉
いなつまや紫山のあゆむ川向　岩泉
いなつまや打わ〻藪のまうれ　湖風

いねつきに月をうらめる露ぞ哀　魚兒

遊女ときいはれしかりけるを
いとゝ久しくあひまりあるを人なとゝ侍る

露烟は世乃ゝ外のうけ弐　去来
父母乃新灯籠ぬきの光弐　由之
なき人の数を学かたれしり　全峰
多ゝ懸乃家ゝ業ゝ嵐哉　文挑

就吉野にしたゝんづる衣

女餓鬼すゝ盆舎利やはの石　文鱗
盆をてい秋なき門乃灯籠弐　嵐雪

貪

魂やうん祭ゝぬ宿ゝ取ゝ　牧足

對愁

ゝゝゝゝ人や隣乃玉ゝ　其角
ゝゝゝゝ門乃ゝ食の祝ゝん　同
遠ゝ史の山いきのゝ弐　観水
朝ゝん浦波ゝ乃ゝ玉　苔翠

志賀の花宮ゝ

ゝゝゝゝのい中しゝ躍ゝ　自悦
躍ゝよあゝい餅乃仲ぬゝん　去来
盲目を舟ゝ玉火ゝ乗　春雷

吹よせて江の一隅や水と雾　苔翠
さを白ものぬ小あり孔　春雷

禅師よまこと

おもひつるもの形一如帝花　文鱗

遊女の酒もりけるを

いろや発情乳のかくれ萩かな　同

如帝の高ゆり梅乃花形るゝ　景道

修園をまこゆき比乃一束哉　冬柏

常陸へ渡りて

牽舟のあらに起しる稚芦哉　全峰

花の秋草よくひあく捨る哉　雷子

萩原や一枝の中も山乃犬　芭蕉

旅宿

木撫伝花見ぬ犬に寝入りけり　観水

入湯乃比

夕萩のはなよ見つゝ湯彩哉　紋水

木賀山中

秋さらば寂しさ加ゑ敲ク雨　翠白

鶏啼て雲ゝ寄ある山路哉　同

山路くゝ鶏よ秋乃しくれ哉　紋水

兄去来ゝ件ゝ
伊勢へ詣ける乃
初時のくゝ詩成

伊勢をのよりの紅葉つゆ[illegible]の[illegible]　千子
紫苑の花雪あちかあるうらの氣　同
うけうつの面をよる切　初風の[illegible]　沾荷

聽閑

簑虫の音を聞よ　蚊よ蚊の庵　芭蕉

少年ゆふ[illegible]

何も言もなし稲うちうて　冬鳥哉　嵐雪

もしのをもたしたる草の一つよ　沾蓬

聖護院の宮覺寛法親王
[illegible]入[illegible]を[illegible]

峯入や宮を[illegible]ちの[illegible]　宗因

かけかの見よ[illegible]　彩酒哉　其角
刈稲酒やほろ[illegible]竹の筒　虚谷
さいさい鳩[illegible]　野水
蕎麦山吉野を蕎麦の[illegible]　其角
笠とり[illegible]富士見る[illegible]　紋水
秋の野や尺[illegible]る小[illegible]小鳥　虚谷
世中やわ[illegible]へて四十かな　風虎

草庵の月見

名月や池をめ[illegible]ますかな　芭蕉
雲折[illegible]人を休むる月[illegible]　同

廉[illegible]詩[illegible]宿根本寺

[illegible]
名月や戸ぬぐ又も寝ん名残　同
月見てと蚊の声よるるたもめ哉　枳風
あ人とあてもなきけふの月　李下
月下獨酌　観水
月見てや紫式部書ふして　蚊足
月雪花恋切ほとゝぎすなき　巴風
ぎすも東むくん月の音　去來
あ人とあるうのなくて月見哉　野馬
月見毎雨ふ剣迄　孤屋
梅の人月みる見や本当此様　破笠

宗鑑ゆふ三郎の
貞室ゆ去つけ心ゆし
彩子蜀て三人の曲

古襪月ゆ霜ノ我老ゆ書哉　文鱗
宿借て小屋ゆの休息
杉の雲

月のくまひ我里人の菜うゝん　去來
月はゆう富士いちのぎし旨ゆ月　冬市
月満て掬于うゝゝ書ゆ那　由之
育ゆう唖のかゝゆゆ月見哉　去來
名月や御堂ゆ鼓かゝて炊ン　其角
良夜雨意

つきよひもこそらにくしや　十四日　同

翠嶂の三日月　人々とらの影を　影棠

月撰人

閑る城うちの月たかくん　凡般の月　虚谷

赤新の高く成るまく月いくん　魚兒

商人も見るもはやくや　あれ舟　文鱗

名月や霧のひかりある　土もあれ張　且只

名月を寝るなく鳥の乱者　濁子

あらけをこうしの月　北鬢　牧足

中よ出く月一節や　雪の電　似兮

名月い沒よなるく　小雨式　吼雲

鉤　名月や月ぐ高月いろあくん　一林

阿新　月見う郎　如泥

秋の新きなく夢さうり　寒見式　紅吁

一きうり新く　雨北きう孔　李下

旅宮水く中ほうにむほうになる

雪をおもひ　ほうこう人きう

けはくらのんうきう

秋若新よ　寝ちらの　蕉の　中式　女千子

もき新　旅ちらの　蕉の　新きくもの　去來

寒かうきく　寒きくなうの　雅　破笠

旅人手　村　ことき　雅　全峰

山里や礫なる夫婦して　枳風
子は泣て去る山賤　山川
ぬるとは知燈を杉の襟氣　牧足
ようやく奥に新あるし
炭ちらす子やや坊の妻　芭蕉

燭床

行くら蕨の炭俵知る蔵氣　酉比

秋興　廿世句

面白く物うき夜の炭俵　露荷
灯を吹　齊沐　乃　雨　其角
樞を敲嵐の窓や月沈て　同

ちらく小雲うむ襟寒し　同
かくら成包ハ鷹ハ蕨ふく　角
山寺の鼎を切ル乃ふ　荷
雲手笠ぬく暮雲の起臥　角
新安時雨を聞て作り　荷
車あり涙の蔵ふ　角
夕閑や道ある馬い支離ふく　荷
無やとも　三石の巣　角
先獨り寂ぬる人を加ゝめ盃　荷
酒賞手ゝ菓蕪の味　角
水ゆく橋乃上ゝ細歩ふ　同

[illegible]の子　若角
夕月の怠惰[illegible]を[illegible]
多く戸立る　電　窓　若
夜寒さに妹[illegible]雪　角
召シ[illegible]車　小　糖ひ[illegible]る　若
御蓋　初[illegible]乃　初　撥　角
田方乃連歌い[illegible]の大和路　若
[illegible]ると傘[illegible]　角
牛[illegible]　月　若
重九　三十九
[illegible]成祝へ菓[illegible]　敦足

四十
辛洗ふ菓杉[illegible]　同
菓[illegible]情春[illegible]　露沾
御蘭生[illegible]男[illegible]菊　巴風
辛[illegible]の花[illegible]香[illegible]の菊　衛門
龜島[illegible]　其角
菊[illegible]　岩翁
[illegible]七百[illegible]師を菊の孫　其角
仲菴雨
[illegible]の菊[illegible]　水の[illegible]　芭蕉
痩[illegible]菓[illegible]　同

雨重く地よ這菊我先折ん　其角
雨数日市いかゝあれ菓の苦　文鱗

旅切

落栗乃いがあらそふて祝ふ乳　観水
落栗よ蔦ふきうゆる嵐う那　透雲
むゝあれ甲斐ある冷や椎の音　岩泉
如ゝ乳ゝゝゝめや椎乃九折　三翁
茸分る夕日如も丸折嘉弐　観水
童さへ拾ゝ徑乃いらうか　同
柿落ゝ松茸みたゝ白ゝ那　魚兒
松茸や松よゝ奥丸雪の寄　孤屋

松茸や一日ゝゝ乃雨の寄　三翁

京出発日

俊鶻ゝゝに残す寄弐　其角
かゝらゝゝ志蔦よ掃ゝ捲ゝ寄　同
谷ゝゝゝ里餉よゝゝる寄弐　冬市

旅切

影書や樽のくゝゝ松乃蔦　巴風
京袖の夢や浮世乃村時雨　遊女薄雲
峯ゝ松鯖あゝゝの夕乳　冬市

秋山　二句

甲斐ゝゝも尺ゝ世乃秋乃夕弐　露沾

秋山や汐もゆるゐ鞆の上　其角

閉門ヲ覓句ヲ秋寂く日土蜘蛛ハ塔の中　三園

なのはなさく菊畑よ塔の中　舟竹

秋盡

僧の入る縄乃すれよ秋の昏　不炊

こゝろ寄もまうれとやの結ふれ　一鐵

六容　欽仙

述懐

乞食もかくの如きぬかし此　破笠

をの枝を責虫よ蟾蜍　其角

よるまさる此枝よ噛む音ぞ寂て　仝

月下いゆるを うゝ柴の数　笠

此手を手ゝうゝめる暮の雪　同

心あるを悲欲のみ多　角

哀

人ちれす戀ちる哀乃上はよ

別ちゝ乃ゝと庵よ金むく　同

名いうゝ名還をうぐり馬ゝく　笠

ちゝとあゝゝ蛙よ多あゝ　同

鎚ゝゝ銃ゝの市ようゝん　角

旅

亀酒の世ゝ蛸めく　同

川ゝ手央燈ゝゝ波まゝ　笠

少捨ゝゝ多ゝの稲磨　同

角

秋風や笠の宿る　天の下　同
松を産（サン）所（ジョ）の角とうの月　笠
米買ふ所へ都へ京の雪　同
雪消を出る甲斐の三二月　角
無常
夢の書かるる堂をたそがれん　同
死出の鳥乃蝋燭を喰　笠
ヒ高く主闇の捨ふれ啼（キ）ふり　同
高もとりいさらぬ髪結　角
幕（アガホ）を躍（ヲド）らせ　同
家よりもまさるゆるうけの秋　笠
梨数
月澄て浦と濤の中　同

佛木どりて暁をまち川　角
定めかき義濃の谷紙お納先　同
鐘（カネ）誘（サイ）ふあらん杉もとの山　笠
癩（モタ）乃もとの冨の世を悟り　同
沐紙
染の戸深く維摩ぶらん　角
乞舞（ヲドリ）は度（ヲリ）會ゆるる家の風　同
名象うれしき幣帛をする　笠
さ月待加茂の祭れるかん　同
瘡落らと拝ふ来　角
かつらを軍の神ぬ花折ふ　同
皆城ちのへん大宮司ら畑　笠

曾久義那之九梨

不拙乃部

十月十一日餞別會

旅人と我名よばれん秋の霧　芭蕉

赤とんぼ　由之

鶺鴒の心ゝ世のゝみ　其角

糧を分ゝ陸山陰の鶴　枳風

かけあゝく芝生苔の淡緑　文鱗

新し舞臺月よまいちや　仙化

中の秋畫工一法きかつるなり　魚兒

鄭てゝし多ゝ杉ゝる漢舟　観水

赤垣や次第ゝ波のひまゝ　全峰

齡ゝ成ゝ君ゝ多ゝ去　嵐雪

酒のゝにさゝ成ゝ盃乃並ゝ　執筆

卯月の雪を掃ゝ法ゝ　翁

鰥ゝる袖つゝはゝ多ゝ新川　由之

蘿一面ゝの雨ゝ橋杭　其角

道ゝゝぬ里ゝ雨を分ゝ　枳風

月ゝや啼ゝん泊瀬の籠人　文鱗

宮籠ゝ匂ひも都ゝ　仙化

おゝゝゝゝすを讽ゝ傀儡　全峰

途中ゝゝゝ来ゝ籠を巻ゝ　翁

仲うく舟本めされ者誰　由之
春ゆへは多年結ひ陸奥ひし　嵐雪
別るく雁をうす琴の手　舉白
吹の宴去ううせの外よ入　就水
萱乃ぬけめ雪を燒家　仙化
老の身乃縄ちの行ちかるる　由之
寒流ちれ跡乃関ち　翁
明暮を于潟の松をかうち法　舉白
命成れ舩ち遠蟹　キ角
起出ちちの法ちん法のちち　嵐雪
志ちぬ市寺成れむるる　就水

蕣や石ゐ坂者日ほ　全峰
小畑さりうさ葉山ゐ佛ん　枳風
卅の戸者ち成酒債ゐ松ちん　翁
つちち星を妹ゐおーゆる　舉白
薫乃志ゐを面白ち夕ちみ　仙化
幟ちうち氏の天王　其角
御牧聖の笛吹智ゐ蟄声　全峰
僧ちるりく腰ち杖　枳風
凡ち所と文字ち子昂ヲ嗅ち　其角
堺の錦蜀をあうへる　嵐雪
俤者や寄虫の戈よ交りちん　就水

籠より出てあぢさゐすゝける　翁

谷深き日うらいむの木目乃ゝ　挙白

春乃来て花咲春乃山乃　由之

芭蕉庵を回郷

時うの冬芳野式うゑ旅立つを　露沾

烏巾を送る

もろ〳〵ゝよりの奥乃頭巾式　素堂

富士の中行痩めし冬乃菊　不卜

木からしの吹りうろすゝ式　岱雪

呼千乃富士を見うれ旅人坂　杉風

比〳〵も大井の風作衣の袁　牧足

旅まて考仕てふまん今乃の袁　仙化

旅疲さうに紙小二つ行ゝ雨　枳風

舟毎若紙小やおゝき袁乃松　李下

葉下のすゝ袁れをゝ句乃り

ぬさんあうゝ送うゝやさん　附雨哉　文鱗

時乃ゝに謐かう雪ん艸乃庵　舉白

箱根山ゝ行乃ゝ日式形ひゝう　由之

蒲園借ス女も在あ式　露荷

萩折ぬむつの紙絹うやこ生で　沾蓬

宿ゝれ袁清る間ゝ乃葉めも　如泥

冬の夜式行ゝ袁ほゝれ式　溪石

冬かれを君が首途(カドデ)や花の雲　其角

詩歌文章にあそはし侍る

しらかづく雪にわすれる入日哉　杉風

眠(ネフタ)る来る客まてかゝす時雨哉　冶蓬

雪よりも先にこほるゝしくれ哉　十来

のこきけハ水にかきしぬ時雨哉　蚊足

蛛(クモ)のゐの破きよとゝる枯葉哉　冬市

蟬のからつまんて棄る木葉かな　為睦

ちらく乃木葉集浴山颪かな　枳風

牛洗ふ蹄枕くは木葉の跡　好柳

深川夜泊

木からしや夜の木魚に吹とゞぬ　李下

櫓(ロヲ)下手あかしいさりも舟かけ　巴風

冬枯乃人目にあまる瓢(ヒサゴ)ゝか那　同

松苗も枯葉か中に見ぬ川鼠かな　枳風

萱屋の便あけわり冬木立　琴風

こと語しる僧とかたらん窓の木立　卜千

甲斐山中にさまよひ
ける夜宿からあくね
かさもおもくて

刀さけてあやしけ雲乃地蔵かな　破笠

初霰や衾(フスマ)にこもる鐘の声　野馬

霰ふりてせなかさひ寒さ狐哉　永中

吉寺北高手いくまぬ櫓の郭　吼雲
芭蕉いろは根無る霜の玄盛　素堂

對客

我庵の高手くゝ尺と月乃色　好柳

和好柳子

人をくゝん冬北なしぬも夕涼ゝ　其角
をの〻酒債をのこる魚賣　好柳
塩風手羽くゝ鳶乃松くゝ　由之

夜坐一句

何とゝ孔く冬和陣をきゝれりゝ　其角
うゝゝゝ火る芋やくゝ人ハ薫モ　同

ほ多のうゝゝ火松くゝ洞の郭　紋水
門ちくゝ世間ハ寒しもくゝ　牧足
炭くゝむ青きくゝ氷る麻耳弐　嵐蘭
灯の影手影ひくゝる火燈弐　魚兒
燈を綾ガ命つくゝ搗の蟻　似兮
岑竈とくゝ経よむ法師弐　不炊
茶北ゝ手罠やく家弐尺くゝん　巴風

寒蠅

憎まれくゝなくゝの人冬蠅　其角

法華を少作て

法と先くゝ親もあくゝぬ火燈弐　嵐雪

髮はらやに門通るみもみられけり　景道

宿僧房

あるまぼろし閑仏の初霜や冬菜哉　其角

駒形や清水うれしや寒念佛　三園

川風やわらぬ雨後寒念佛　湖水

曉のつくはよりやうや念佛　其角

星ひかりの五位一夢はさむる哉　湖春

炎流や涼揃うるちりも哉　冬柏

水鳥乃鉢目鑑しるうねり哉　由之

あの男鉢は寒るうつちりも　山夕

鈴ふる婦鷹は晴ぬる尾上哉　冬市

十二月九日たつ雪鉢のうつろひ

初雪や聲ヒ菴ン平ノ孫集　芭蕉

嵯友人

君史をうけはもをもんをまるけ　同

山庵の夕雪

雪ふるゆるる小松原　露沾

藤川や市に咲ん雪ぬくま　沾荷

窓明く間雪ふる夕ゆふ　魚兒

黄昏もるる雪若ふる音　孤屋

友静亭に物ふて

比良の雪赤鯛より詠めけり　自悅

[illegible]へも小聖へもゆで[illegible]をみる　文鱗
[illegible]り鳥森所[illegible]　濁子
[illegible]破[illegible]　自棄
初[illegible]月[illegible]をたづかる、篠竹に　由之
[illegible]治公[illegible]て初[illegible]
[illegible]盆[illegible]　其角
[illegible]朝[illegible]　露沾
日[illegible]鼓[illegible]　露荷
[illegible]炉[illegible]炭　其角
[illegible]の竹を[illegible]

二すぢとけさはまるぐん道[illegible]　沾德
[illegible]　安重
辛崎[illegible]の詠[illegible]　観水
[illegible]の干[illegible]乃[illegible]　蚊足
[illegible]　魚兒
慶運り髑髏や[illegible]　紋水
衣[illegible]や衣桁を掛[illegible]　孤舟
初[illegible]　仙化
白川や関[illegible]　東頌
草菴
門乃[illegible]あるやと訪[illegible]　其角

雪晴や寒日の道ちらし　全峰

波のうへは雪あり幌とる人の　枳風

門のお傘さくみ結ぶ　斧鉞

雪深し　科治　白うめ　鉤雪

拂ひ捨ては公ともかや雪霙　コ齊

徳倉の僧古ともうん寒の梅　露沾

漫成五倫

君臣有義

家のあるじの成高乳ともまれ　其角

父子有親

鮒汁や慢ともさう兎ゐ物食

夫婦有別

我ひとおめをおもひ

長幼有序

袴着ハ娘のあるじ乳

朋友有信

君ともを我婚ともを返ス志ともう

家ともを我ともを高ぶせんさびを　沾荷

節分

豆ともう我もん若鬼ともん　野馬

市ま入ともう成師を式　素堂

ともの多を鬼ともすぶ　魚兒

雄年新むむ月のしくすの和　紋水
室乃清さ咲ます女師を式　如流

子を祝ひ

羽子板さ来を打の師を式　露沾
欲をもむ月はうさを見雲　文鱗
淋しさ考船をあるとの苦　枳風
以あやつりを浦り年うん　孤屋
年の夜や人よ乃十うう　去來

善悪なく大晦日寒酒うれ　敗足
しるあの市は笑やう年のう　李白

閑

年の一夜王なの狐なゆん　素堂
晩月やゆ会入る大晦日　蚊尺
月雪ふさうけしう乃昏　芭蕉

年くの晩
ふ式さいりなるう年の貧　其角

貞享丁卯歳霜月仲三日

雄平新しむ月のしくすりに　紋水

貞享七年庚寅霜月中三日

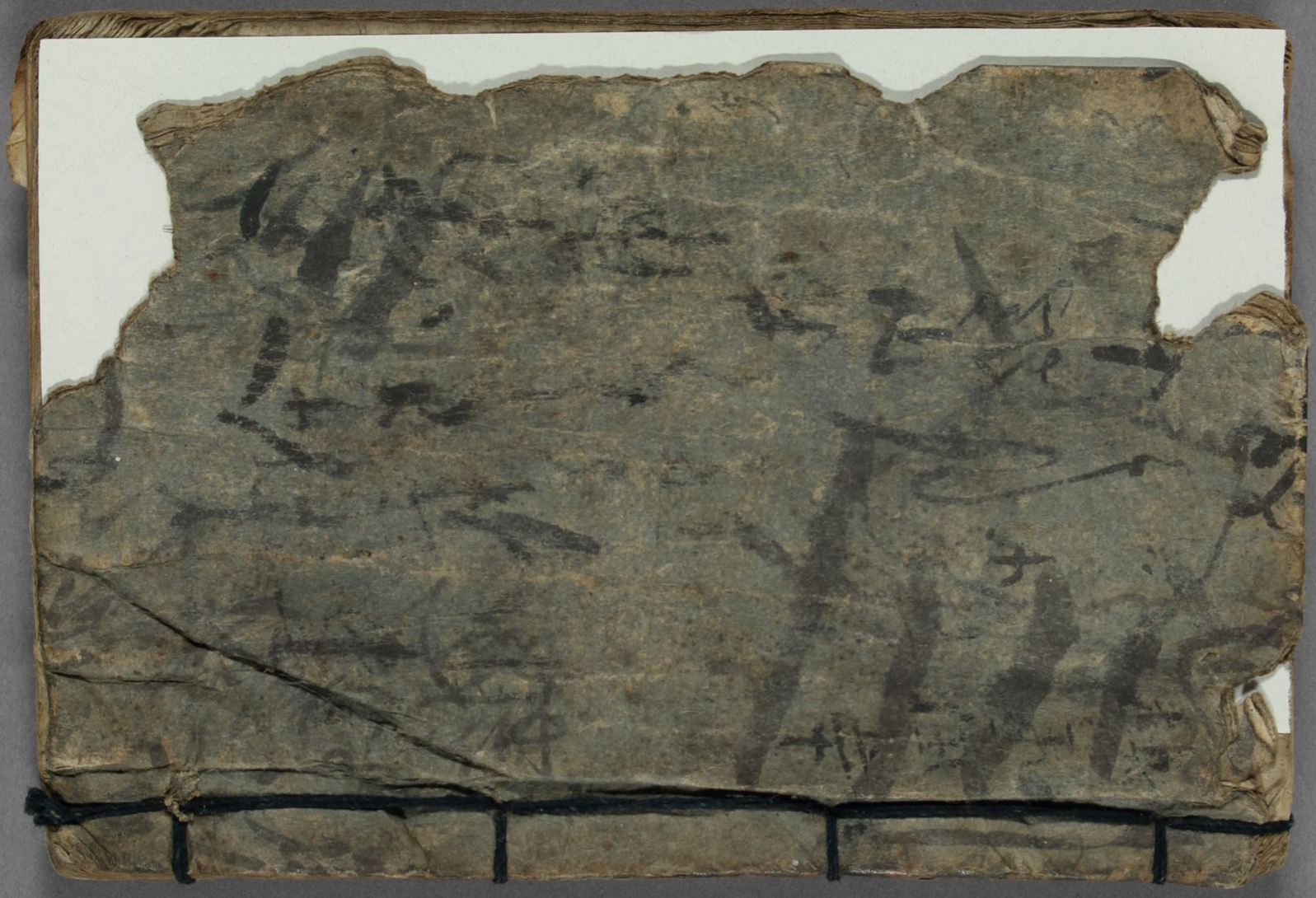
もゝたせしくらの倉　其角

風雲をつゝみ入れし倉　曽黛

一朝に今の人ら大意日　独孔

ゝ本の一夢王の蔵　春堂

閑

若更衣

室家紀